特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告

～中山間地域総合整備事業施設間連絡道整備事業に伴う発掘調査～

第108次　第110・111次　第116次調査

2005

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

口 絵 1　第108次調査

字諏町・下城戸地係調査区全景（南から）

字木蔵地係調査区全景（東から）

口 絵 2　第110・111次調査

第110次調査 SB4989全景（東より）

第111次調査 SB5002全景（南東より）

序

ここに福井県福井農村整備事務所の主管とする一乗谷朝倉氏遺跡施設間連絡道整備事業に伴う発掘調査が終了し、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡調査報告書　第108次、第110・111次、第116次調査』が刊行されることになりました。

この事業は下城戸の北に位置する当資料館と上城戸の南に位置する一乗ふるさと交流館とを結ぶ連絡道、いわゆる遊歩道で、遺跡内を通ることから遺跡の見学道としても重要な役割が期待されていました。文化庁からも史跡内の遊歩道として全国史跡整備事業の模範となるものにしてほしいとの要望がありました。

そこで、遺跡の保存・活用の上から遊歩道をどこに通すのが適切かをはじめ種々の問題点を農村整備事務所と当資料館が整理・調整し、その結果を朝倉氏遺跡研究協議会にはかり最終調整を進め承認を得ました。

以上のような経過を経て立派な遊歩道が完成しました。観光客や見学者が一乗谷朝倉氏遺跡を見学する上でたいへん便利になり、大いに喜ばれるものと期待をしています。多くの方々に利用されることを切に願っています。

最後になりましたが、計画・発掘・工事・完成に至る各関係機関および関係者各位のご協力、ご指導に対して衷心より感謝申し上げまして序といたします。

平成18年3月1日

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
館長　青　木　豊　昭

目　次

序

目　次 …… 7

図版目次 …… 8

例　言 …… 11

Ⅰ　事業概要

1．調査に到る経緯 …… 1

Ⅱ　第108次調査

1．調査の経過と概要 …… 3

2．遺　構 …… 8

3．遺　物 …… 11

Ⅲ　第110・111次調査

1．調査地区の環境 …… 15

2．遺　構 …… 17

3．遺　物 …… 19

Ⅳ　第116次調査

1．調査概要 …… 23

2．遺　構 …… 24

3．遺　物 …… 26

図 版 目 次

口 絵（カラー）

口絵１　第108次調査字瓢町・下城戸地係調査区全景（南から）
　　第108次調査字木蔵地係調査区全景（東から）
口絵２　第110次調査SB4989全景（東より）
　　第111次調査SB5002全景（南より）

図　面

第108次調査

第１図　第108次調査遺構詳細図（1）
第２図　第108次調査遺構詳細図（2）
第３図　第108次調査遺構詳細図（3）
第４図　第108次調査遺構詳細図（4）
第５図　第108次調査遺構詳細図（5）
第６図　第108次調査遺構詳細図(6)
第７図　第108次調査遺構詳細図(7)
第８図　第108次調査出土遺物(1)　八地谷地区
第９図　第108次調査出土遺物(2)　八地谷地区
第10図　第108次調査出土遺物(3)　八地谷地区
第11図　第108次調査出土遺物(4)　瓢町地区
第12図　第108次調査出土遺物(5)　瓢町地区
第13図　第108次調査出土遺物(6)　瓢町地区
第14図　第108次調査出土遺物(7)　瓢町地区
第15図　第108次調査出土遺物(8)　瓢町地区
第16図　第108次調査出土遺物(9)　瓢町地区

第110・111次調査

第17図　第110次調査遺構詳細図
第18図　第111次調査遺構詳細図
第19図　第110次調査出土遺物
第20図　第111次調査出土遺物

第116次調査

第21図　第116次調査遺構詳細図(1)
第22図　第116次調査遺構詳細図(2)

写 真 図 版

第108次調査

PL. 1　第108次調査字木蔵地係
　　調査区全景SS260（南から）
　　SS260（北から）
PL. 2　第108次調査字木蔵地係
　　SV4903・4904・4906（南から）
　　調査区全景SV4904・4906、SD4810・
　　SX4926（北から）

PL. 3 第108次調査字吉野本地係
調査区全景SS2952(南から)
調査区全景SS2952(北から)
PL. 4 第108次調査字甑町地係
SS622(南から)
SS622(北から)
PL. 5 第108次調査字下城戸地係
SS622、SV4926、SI4927、SD4928(南から)
SS622、SD4931・4932(北から)
PL. 6 第108次調査字ド城戸地係
SI4910(東から)
SI4914(東から)
SI4927、SD4928(東から)
PL. 7 第108次調査出土遺物(1)
PL. 8 第108次調査出土遺物(2)
PL. 9 第108次調査出土遺物(3)
PL. 10 第108次調査出土遺物(4)
PL. 11 第108次調査出土遺物(5)
PL. 12 第108次調査出土遺物(6)
PL. 13 第108次調査出土遺物(7)
PL. 14 第108次調査出土遺物(8)
PL. 15 第108次調査出土遺物(9)

第110・111次

PL. 16 第110次調査区全景
PL. 17 調査区全景(南から)
SK4981～4985全景(東から)
SB4994近景(北から)
SF4955近景(東から)
SE4990近景(西から)
PL. 18 SD4992、SX4993近景(東から)
SX4988、SB4989全景(北から)
SD4986全景(北から)
PL. 19 第111次調査区全景
PL. 20 SB5002全景(西から)
SB5002全景(北から)
SK5008・5010・5011、SX5009全景(北から)
PL. 21 第110次調査出土遺物(1)
PL. 22 第110次調査出土遺物(2)
PL. 23 第111次調査出土遺物

第116次調査

PL. 24 調査区全景
PL. 25 全景 (西南から)
SS1850・5801、SD1853近景(西から)
SD5805、SI5803近景(西から)
PL. 26 第116次調査出土遺物

挿　図

挿図1　第108次調査区(字瓢町、字下城戸地係)周辺地形図
挿図2　第108次調査区(字木蔵、字吉野本地係)周辺地形図
挿図3　第110・111次調査区周辺地形図

表

表1　第108次調査出土遺物一覧
表2　第110次調査出土遺物一覧
表3　第111次調査出土遺物一覧
表4　第116次調査出土遺物一覧

付　図

付図1　一乗谷朝倉氏遺跡地形図
付図2　第108次調査遺構全測図
付図3　第108次調査遺構全測図
付図4　第110次調査遺構全測図
付図5　第111次調査遺構全測図

例　言

1．本書は福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が平成12・13・15年度に実施した、一乗地区中山間地域総合整備事業に伴う発掘調査報告書である。

2．調査は、福井県農林水産部福井農林総合事務所の依頼を受け、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館が実施した。

3．発掘調査の次数・調査期間・担当者は次のとおりである。

第108次調査　平成12年４月１日～８月11日　南洋一郎、佐藤圭

第110次調査　平成13年５月８日～７月31日　佐藤圭、水村伸行

第111次調査　平成13年７月３日～７月31日　佐藤圭、水村伸行

第116次調査　平成15年８月20日～10月17日　水野和雄

4．本書の執筆分担は次の通りである。

1　水村伸行

2－1（本文）佐藤　圭・（遺構図トレース）工藤俊樹・川越光洋・北野薫

2－2　宮永一美

3　水村伸行

4　（本文）水野和雄・（遺構図トレース）工藤俊樹

5．遺構番号の頭に付した略記号は下記のとおりである。

SA：土塁（土塀・柵）、SB：建物（礎石・掘建柱等）、SD：溝・濠、SE：井戸、SF：石積施設、SG：池・庭、SI：門、SK：土壙（柱穴・埋甕遺構等）、SS：道路（通路）、SV：石垣、SZ：暗渠、SX：その他の遺構

I 事業概要

Ⅰ　事業概要

1．調査に到る経緯

福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館(以下、資料館と略)に、福井県福井農村整備事務所(以下、農林と略)より特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡内を縦断する遊歩道、および史跡指定地隣接地においての関連施設建設計画についての協議が最初に持ち込まれたのは、平成10年の冬であった。その場においては、史跡指定地内については資料館事業の骨格である『朝倉氏史跡公園基本構想』[1]に、縦断遊歩道の計画が記されているため全くの新規路線での計画は難しいものの、『朝倉氏史跡公園基本構想』[2]による遊歩道に沿う形での計画であるならば可能性が残る旨の回答をおこない、協議を進めることで合意した。また、農林には資料館の諸事業について審議する朝倉氏遺跡研究協議会(以下、研究協議会と略)において、当事業についての合意が必要であることを説明し、平成10年10月12日開催の第27回研究協議会において、農林より事業説明をおこなうことを申し合わせた。

第27回研究協議会では、設計思想および路線についての説明があり、研究協議会として事業の必要性は了承するものの、設計およびデザインの詳細については資料館と綿密な協議のうえ次回研究協議会において改めて説明する旨の指導があった。

第28回研究協議会は平成11年９月14日に開催され、前回提示路線からの一部変更点を説明した。また昨年度来資料館と農林により検討を重ねてきた結果として遊歩道の詳細設計およびデザインについて報告をおこない了承を得た。これを受け資料館として、次年度発掘調査地の中に施設関連給道予定地を含めることとした。その調査内容については本報告書第２・４章を参照いただきたい。

平成12年10月８日には、第29回研究協議会が開催され、史跡指定地外の隣接する地区に建設予定の活性化センターについて討議されたが、設計デザイン等の実際的な問題を了承されるには到らなかった。このため設計デザインについては、研究協議会内の環境および建築専門委員に個別に指導を受けることを条件に事業が了承された。この決定を受け資料館は、次年度発掘調査地に活性化センターおよび付帯工事予定地を含めることとした。調査内容については、本報告書第３章を参照していただきたい。

平成13年には県の税収不足に起因する事業の見直しが図られ、11月30日開催の第30回研究協議会では、規模縮小見直し案が提示され了承された。活性化センターは「一乗ふるさと交流館」という名称で本年オープンしたのち、平成14・15年度の２ヵ年にわたり遊歩道敷設をおこない本事業が終了した。

---

(1)『朝倉氏史跡公園基本構想』近畿都市学会　昭和47年

(2)(1)に同じ

Ⅱ 第 108 次 調 査

Ⅱ　第108次調査

1．調査の経過と概要

第108次調査は、中山間地域総合整備事業一乗地区施設間連絡道整備計画に伴なう事前調査として平成12年４月１日から８月11日まで発掘調査が実施された。この施設間連絡道は、福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館と活性化センターを起終点とし、城戸の内において一乗谷川左岸遺構群を縦断的に網羅して見学するための遊歩道であり、一乗谷の南北方向の幹線遺路の遺構をその計画路線として活用することが考えられた。特に町並立体復原地区と平面復原地区を結ぶ部分の遊歩道は、平成11年度に行われた第104次調査の結果、町並立体復原地区から八地谷に延びる南北方向の幹線道路の存在が推定されたことから、検出された道路遺構、並びに道路遺構推定ルート上への計画路線のルート変更が行なわれることとなった。このため町並復原地区の北部において南北に縦走する幹線道路の遺構を検出して施設間連絡道の計画路線を決定するための基礎資料を得ることが早急に求められた。また平面復原地区の南端部において、すでに検出されている両側を土塁石垣で囲まれた南北方向の幹線道路の続きを確認することが求められた。

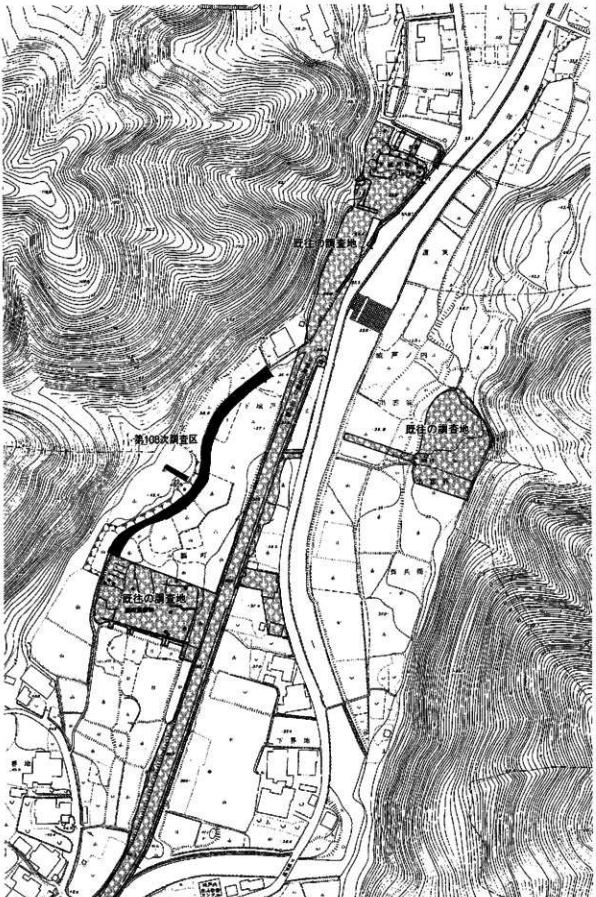
次に城戸の内の北部の字瓢町地係と字下城戸地係においても道路遺構上に施設間連絡道のルートが計画されたので、その事前調査として道路遺構の検出確認を行なった。なお字下城戸地係の道路西側の山側の小高い部分に、当初ポケットパークを設定する計画があったため、トレンチを入れて遺構の有無を確認した。

このように第108次調査は施設間連絡道の路線計画の事前調査であり、道路遺構の検出を目的として発掘調査を行なった。その調査区の南端と北端は約950m隔たっており、また調査区の幅は５～８mに過ぎない。そして検出した道路遺構の総延長は300mに及ばんとするものである。最初にその位置について述べる。まず字木蔵地係の調査区は幅５～８m長さ約75mで、城戸の内の中央部、八地谷の裾、一乗谷川の西岸部、八地谷川の南岸部にあり、月見櫓の東方60～70m、朝倉義景館の西北方約180mに位置している。南は平成11年度調査の第104次調査区に接し、西側は今回の調査の翌年に行なわれた第112次調査区に接している。北には八地谷川がある。

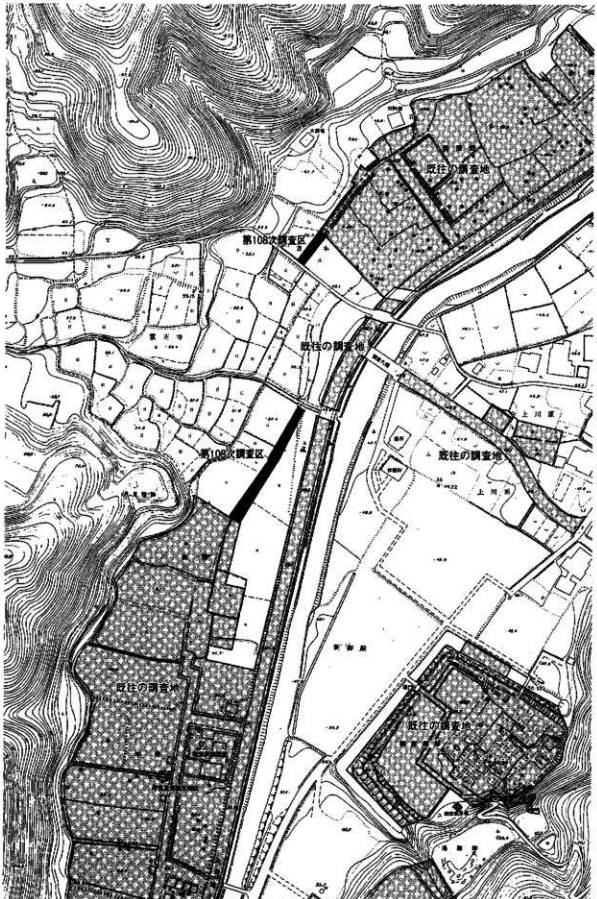
次に字吉野本地係の調査区は幅約５m長さ20mの小さな区画で平面復原地区南端部の山裾にある幹線道路遺構の延長部分を確認したトレンチである。その位置は城戸の内の中央部、八地谷の裾の北端部にあたり、今回の調査区の北は昭和60年度発掘の第52次調査区に接している。また南は現在八地谷に入る唯一の東西方向の市道に接している。

次に字瓢町・下城戸地係の調査区は城戸の内の北部、一乗谷川の西、下城戸跡の南に位置し、昭和51年度に発掘された第18次調査区の西端部から旧道に沿って北に延びる延長約200mの蛇行した調査区である。また字瓢町地係北端部ならびに字下城戸地係南端部の西側の小高い部分に長さ60m幅20mほどの平坦部があり、春日神社蔵「一乗谷古絵図」に記されている「真正寺跡」に比定される。この部分の北部にトレンチを東西方向に設定して遺構が見られないことを確認した。

調査は南よりの調査区から始められ、南から北に向かって進められた。その結果、南北方向の幹



挿図1　第108次調査区（字瓢町、字下城戸地係）周辺地形図（1/2000）



挿図２　第108次調査区（字木蔵、字吉野本地係）周辺地形図（1/2000）

線道路の状況を各地域で把握するという調査の目的はほぼ達せられ、道路3、土塁・石垣計20、溝15、門5、その他の遺構10など幹線道路とその両側部分を構成する遺構の一部が検出された。

今回の調査の後、平成13年度から16年度にわたって八地谷の計画調査が行われ、八地谷における町割と幹線道路の実態が総合的に明らかになったが、それらの詳細については国庫補助事業による発掘調査、および環境整備事業の概要報告書並びに報告書に譲る。

なお今回の調査の叙述において、南北方向、東西方向という呼称は当遺跡の各地域における町割を基準としていっている。したがって地域によって実際の地図上の方位とは異なっている。また叙述は、調査の進行に準じて南から北へと行なっている。

第108次調査日誌抄

平成12年

5月8日(火)　晴れ　字木蔵地係調査区南半部の耕土取りを続け、発掘機材の点検。

5月9日(水)　晴れ　耕土取りほぼ終わる。

5月11日(金)　晴れ　ベルト・コンベアーを並べ、遺構検出にとりかかる。土塁石垣の頭が少し出る。大量の石が出る。

5月15日(月)　良好に残る石垣列を検出。道路を挟んで反対側に土塁石列を検出。その間には大きな石が転がっている。

5月16日(火)　曇り　セクションベルトより北側、調査区西側に溝石を検出。その北方にある新しい石垣をはずす。

5月17日(水)　曇り　セクションベルトより南側の溝の側石の天端を検出した。

5月19日(金)　曇り　遺構検出、溝(SD4810)の精査。

5月22日(月)　晴れ　字木蔵地係の調査区の北半分の草刈、耕土取りを始める。

5月23日(火)　晴れ　八地谷川の南約30m分に現存する石垣をはずす。裏込め石はほとんどなく耕土が詰まっている。また旧道のたたきの舗装の除去をする。

5月25日(水)　晴れ　字木蔵地係調査区北半部の西側の状況を見るために任意の場所に東西方向のトレンチを西側に入れ、旧道より西側約1mのところにもとの石垣が残っていることを確認した。

5月29日(木)　晴れ　新しい石垣より西に1～2mの位置で石垣列SV4904を検出。

5月30日(火)　晴れ　石垣SV4904の手前の溝SD4810の検出。トレンチの隅りに笏谷石の踏石を検出。

6月6日(火)　トレンチ部分を拡大して門を検出。この門より南側の溝SD4810の側石を検出。

6月7日(水)　晴れ　字吉野本地係調査区の表土・耕土取りにかかる。

6月8日(木)　晴れ・曇り　字吉野本地係調査区内の東部に土塁石垣列を検出。

6月13日(火)　字吉野本地係調査区の西側の状況を見るために任意の場所に東西方向のトレンチを西側に入れ土塁石垣列を検出。

6月14日(水)　トレンチより南側部分について土塁石垣の続きを検出。

6月16日(金)　字吉野本地係の調査を終え、石出しを行なう。

6月20日(火)　字瓢町地係の現場に移動。ベルト・コンベアー、発電機等発掘資材の移動。耕土取り。

6月21日(水)　字瓢町地係の発掘。調査区西側石垣の際の旧道上に黒色耕土が堆積しており、この中に大量の遺物が含まれる。

6月29日(木)　曇り　道路の砂利敷面の検出。

6月30日(金)　曇り　砂利敷面の精査。

7月7日(金)　砂利面の検出。

7月14日(金)　曇り、小雨　字下城戸地係に達する。

7月19日(水)　晴れ　字瓢町地係北端に石垣検出。

7月21日(木)　晴れ　字下城戸地係の耕土取り、遺構検出。耕土の直下に大粒の砂利面検出。

8月1日(火)　字下城戸地係北端部に至る。

8月2日(水)　晴れ　同上北端部耕土取り。耕土直下に砂利面、溝石列検出。

8月4日(金)　字下城戸地係調査区北端部遺構検出。

8月7日(月)　晴れ　伝真正寺跡トレンチの発掘にかかる。

8月8日(火)　晴れ　字下城戸地係調査区の溝遺構、博物館実習生発掘。

8月10日(木)　晴れ　溝検出。

8月11日(金)　晴れ　道路面の清掃。午後コンベアー、足場板等撤収。

2．遺　　構（第1～7図、PL.1～6）

SA4901　字木蔵地係調査区の南端部西側に検出された南北方向の土塁石垣である。長さ14.5m。径0.5～1mの大ぶりの石を使用している。下の1石のみ残っている。この土塁の南端は第104次調査で検出された土塁SA4781と接続し、その部分から東西方向の土塁が西に分かれて月見櫓の方に向かっている。北端は門SI4909に接続する。

SV4902　字木蔵地係調査区の中央より西側に検出された南北方向の石垣である。長さ約16m。径0.5～1.2mの大ぶりの石を使用している。大体下の1石を確認。北よりの約6mは2石残るところもある。南端は門SI4909。北端は未詳であったが、第112次調査で直交する東西方向の道路が検出され、これに接続することが確認された。

SV4903　字木蔵地係調査区中央部の西側にある南北方向の石垣列である。径0.3～0.6mの石を積む。長さ18.8m。他の土塁石垣のように面がそろっていない。北端部は門SI4910に接し、南端部は未詳であったが、前述の直交する東西方向の道路に接している。

SV4904　字木蔵地係調査区北端部の西側にある南北方向の石垣列である。全長約19m。2石確認できる部分もあるが、概して上に積まれた石のほうが大ぶりで、径0.7～1.2のものもみられる。北端部は、第112次調査で今回の調査区の北約3mのところで八地谷川右岸の護岸が検出され、これと直角に接することが知られる。南端部は門SI4910に接している。

SA4782　字木蔵地係調査区の南端部の東側に位置する南北方向の土塁である。すでに前年の第104次調査で出土しており、今回の調査区の南に約31m延びていたことが確認されている。今回それに続く約16m分を検出した。その北方は石列が残っておらず未詳。東側は削平されており詳らかでない。

SV4905　字木蔵地係調査区中央の東側に位置する南北方向の石垣列である。約8m。下の1石のみ確認された。南方に離れてある南北方向の土塁SA4782との接続関係は未詳であるが、それに連続するものと推定される。

SV4906　字木蔵地係調査区北部の西側に位置する南北方向の石垣列で約46mにわたって断続的に連なっている。その南端部は東に直角に折れ、2mほど残存している。この石垣は発掘調査前に残存していた石垣の裏側にあって、今回の発掘により新たに出土した石垣列である。南北方向の石垣SV4902、4903、4904の東約1.5mに並行して後から作られた新しい石垣である。南端部の東に折れ曲がった部分は北側に面がある。

SD4810　字木蔵地係調査区の西側よりの全域を南北方向に流れる溝である。幅0.2～0.3m。長さ75m。溝底の標高は調査区南端部で49.91、北端部で48.84。溝の側石が良好に残されている部分も多く道路面の推定材料となった。

SD4907　字木蔵地係調査区の中央やや南よりのところに位置する東西方向の溝で、溝SD4810と暗渠SZ4911でつながる。側石の残りはあまり良くない。

SS260　字木蔵地係の調査区全体を南北方向に走る道路である。前述のように今回の調査でこの道路の西側の土塁石垣、門、溝等がほぼ完全に検出され、道路西側の状況がかなり明らかになった。一方、この道路の東側については、調査区南半部で土塁石垣が検出されたが、調査区北半部の

東側ではすでに遺構は削平されており群らかでない。この道路の路面には、調査区南端部の道路中央に一部砂利面が残っていた。また調査区北半部の道路中央には幅0.8m厚さ0.1mの堅い黄色土が残っており、この部分に旧道が作られたことがわかる。この道路SS260の全幅は、両側の土塁石垣が折れ曲がっているため一定しないが、溝を含めて4.2～3.6mである。また検出された道路面中央部の標高は調査区南端で50.00、北端部で48.85であり、平均勾配は15.3‰である。

SI4909、4910　字木蔵地係の調査区の西低の南と北に検出された屋敷の道路SS260に開かれた門である。特に北側のSI4910は、今回の調査で溝の踏石と門柱の礎石が検出された。

SV4912　字吉野本地係調査区の西側に検出された南北方向の石垣列である。長さ約15m。下から2石ないし3石確認した。北端は門SI4914に至り、南端は調査区外に続くとみられる。

SA4913　同じく字吉野本地係調査区の東側に検出された南北方向の土塁である。長さ約13m。径0.5～1.1mの大ぶりの石を積む。本調査区の北隣の第52次調査区で検出された門SI3189に接続することは明らかであるが、途中2mほど石が抜けている。

SS2952　字吉野本調査区を南北に走る道路である。長さ約21m。幅3m。道路面の標高は南端部49.14、北端部48.84。勾配は15‰。なお今回の調査では、この道路の両側の状況は確認されていない。

SV4915　字瓢町地係調査区南端の西側に検出された南北方向の石垣列である。長さ約11m。北端部に溝SD4916があり、道路路側の石垣である。

SD4916　道路側溝で約2m検出した。

SV4917　SV4915の北5mに位置する石垣で、約2m検出された。約11m離れたSV4919に連続していたと見られるが、未詳。

SV4919　字瓢町地係調査区の南寄り、西側に位置する南北方向の石垣列。長さ約8m。溝SD4920を伴なう。

SD4920　道路側溝で北端で東に折れる。

SV4921　字瓢町地係調査区の中ほど、西側に位置する南北方向の石垣である。約6m直線で並び緩やかに西側に入る。

SV4922　SV4921の東約1mに位置する石垣である。門の袖石を含めて数石のみ検出した。

SI4923　石垣SV4922、4924に挟まれた山側の屋敷地に入る大きな門である。両側の袖石が残っており、門の幅は3.0mを測る。

SV4924　門SI4923から北に延びる石垣列。門から5mはなれたところでわずかに折れ曲がり、合計14.5m検出した。この門SI4923と石垣SV4924の東側の道路路面上に長さ約5m、幅約1mにわたって焼土が堆積しているのがみられた。

SV4925　字瓢町地係調査区の北端部西側の山裾に付いている石垣である。緩やかな曲線をなしており、長さは約20m。径0.8～1mの大ぶりの石を並べている。また大型の石3個が東側に倒れている。なおこの石垣とその東側約3mほど離れて並ぶ石列の間の路面上に砂利面を検出した。

SV4926　字下城丁地係調査区の南端西側の石垣列である。径0.8～1.4mの大型の石を並べる。長さ約8m。北は門SI4927に連なる。なおこの石垣の東側約1.2mには笏谷石の踏石SX4936が3mにわたって置かれている。またこの石垣の東側約3～4mに石列がありその間に砂利面が検出された。

SI4927　石垣SV4926と4930の間にある幅3mの大型の門である。「真正寺跡」と伝承される山際の高台の屋敷地に入る門である。北側の袖石は倒れており、幅1m長さ1.8m。南側の袖石は幅1.4m

高さ1.7m。門内は未調査。

なお真正寺跡伝承地の上に長さ15.2m幅3mのトレンチを設定して地層を観察したが、耕土の下に約0.4mの厚さで整地土があるもののその下は黄色土で遺構はみられなかった。

SD4928　門SI4927の北側の袖石の内側から道路を横断して流れる東西方向の溝である。幅約0.3m長さ7m。側石の天端が確認される。

SV4929　字下城戸地係調査区の北寄り西側にある緩やかに湾曲する南北方向の石垣である。

SV4930　門SI4927の北に接続する南北方向の石垣列である。石の並びは直線的で2か所で屈曲して延べ約30mにわたって続いている。

SD4931　字下城戸地係調査区の北端西端に道路側溝として作られた長さ約35mの南北方向の溝である。一部は暗渠SZ4937となっている。

SD4932　溝SD4931の東側約6mのところをほぼ並行して走る溝である。長さ約12m。南端部には石敷遺構SX4933がある。

SX4934、4935　字瓢町地係調査区の中ほど東側に位置する石列で、この二つの石列は直線的につながり、道路に関連する遺構とみられる。

SS622　字瓢町地係・字下城戸地係調査区の全体を南北に走る道路である。延長約200m。西の山側とは石垣や門、溝等の遺構によって明確に区分されるが、東側については、溝SD631、石列SX4935、4934、溝SD4932など断片的にしか路側の状況は知られない。そして真正寺跡附近では道路遺構の東側は近代の用水整備によると見られる新しい時期の石列やコンクリートなどにより破壊、削平されており、詳らかでない。道路遺構として確実に確認できるものとして、道路の一部に砂利面が残っていたところがあり、これにより道路の標高が知られる。道路幅は不定で溝を含めて5.5～6mである。遺路中央の標高は調査区南端部で39.79、北端部で36.63、平均勾配は15.8‰である。なお路面の一部に笏谷石の踏石SX4936が残っていた。これはこれ以前の第102次、104次調査で南北幹線道路SS260上に約27mにわたって検出した踏石SX4761に類似するものと見られ、一定時期における道路面の高さをうかがう資料になるものと思われる。

以上各遺構についてのべたが、この調査の成果はひとことで言って一乗谷川左岸を南北方向に走る幹線道路SS260、2952、622の状況を各調査地において確認したことである。まずSS260は城戸の内の南部に位置する町並立体復原地区の南部を南端とし、今回の調査でその北端、八地谷川に至る部分を検出した。SS2952についてはごく小規模のトレンチ調査であったが、今後その南端と八地谷地域の町割の関係についての調査が課題となる。SS622については、今回の調査により連続する一本の道であることが確認され、遊歩道設定の模拠を提供した。そしてこの道路は、その北約30mに位置する昭和54年度の第35次調査で発掘された南北方向の道路SS1340と規模や構造が似ており、位置的にも連続するものと考えられる。今回検出された3本の道路の勾配は15～15.8‰で位置が異なるにもかかわらずほぼ同じであり、幹線道路として歩きやすいなだらかな路面が造成されていたことがうかがえる。

3．遺物（第８～16図、PL.７～15）

第108次調査で出土した遺物の総数は、14,805点である。その内訳は表１に示すとおりである。本調査区は遊歩道設置範囲の調査ということで、八地谷地区から瓢町地区までという南北に細長い調査区となっている。朝倉時代の道路遺構の検出を目的としたので、通常の武家屋敷区画の発掘調査と異なり、出土遺物には、一括遺物や接合できるものが少なく小破片が多いという特徴がみられた。八地谷地区と瓢町地区間は離れているので、地区ごとにまとめて主要遺物を紹介する。

大別	細別	器種	点数	%
日本製	越前焼	壺	3,935	
		甕	721	
		鉢	198	
		擂鉢	1,065	
		橋	36	
		胴皿	1	
		その他	1	
		小計	5,957	40.24%
	土師質	皿	7,003	
		土釜	52	
		上鉢	5	
		小壺	1	
		忘押	1	
		その他	3	
		小計	7,065	47.72%
	鉄釉	碗	60	
		皿	4	
		鉢	2	
		壺	42	
		茶入	2	
		坏	1	
		小計	111	0.75%
	灰釉	碗	4	
		皿	50	
		鉢	12	
		香炉	1	
		壺	10	
		小計	77	0.52%
	瓦質	風炉	6	
		香炉	2	
		鉢	9	
		その他	1	
		小計	18	0.12%
	信楽	壺	19	
	備前		2	
	須恵器		2	
	その他		14	
		小計	37	0.25%
	近世		13	0.09%
日本製合計			13,278	89.69%

大別	細別	器種	点数	%
中国製	青磁	碗	79	
		皿	146	
		鉢	36	
		瓶	1	
		香炉	17	
		壺	17	
		瓶	3	
		その他	3	
		小計	302	2.04%
	白磁	碗	11	
		皿	320	
		坏	16	
		壺	1	
		鉢	1	
		その他	3	
		小計	352	2.38%
	染付	碗	44	
		皿	216	
		坏	8	
		壺	2	
		鉢	4	
		その他	1	
		小計	275	1.86%
	褐釉	壺	25	0.17%
	瑠璃釉	碗	1	0.01%
中国製合計			955	6.45%
朝鮮製		碗	8	
		壺	13	
朝鮮製合計			21	0.14%
輸入陶磁器合計			976	6.59%

大別	細別	器種	数量	%
金属製品		鉄鏡	27	
		釘	32	
		その他	9	
金属製品合計			68	0.46%
石製品		バンドコ	160	
		硯	11	
		砥石	6	
		盤	50	
		鉢	23	
		臼	16	
		風炉	3	
		玉石	19	
		茶臼	10	
		石仏	16	
		板碑	2	
		井戸枠	1	
		支脚	1	
		その他	139	
石製品合計			457	3.08%
その他		壁土	21	
		その他	5	
その他合計			26	0.18%
総合計			14,805	100%

表１　第108次調査出土遺物一覧表

八地谷地区

本地区は、第112・113次調査区の東側に接する地区で、平井地区の南北道路に続く道路遺構を検出した。遺物数は1,834点あった。また八地谷奥に入るための林道を挟んだ吉野本地区については、わずかな調査面積で、遺物数も267点と少なかったので本地区にまとめた。

越前焼　1は口径24.8cmを測る小甕である。2・3も同じく口縁部が短く立ちあがる中甕である。4～7はⅣ群の大甕で口縁部が肥厚している。8・9は小甕。10は口径9.6cmを測る肩の大きく張る壺である。11・13・14は小型の壺で、いわゆるお歯黒壺と呼ばれるタイプのものである。12は底径16.0cmを測る壺である。15～18は平鉢。19～22は口縁が内湾するタイプの鉢である。23・24は桶。25は口径19.0cm、器高19.8cmを測る桶で、色調は暗紫褐色を呈し、胎土は堅緻で焼成良好。26～28は口縁が内傾するⅣ群[11]の擂鉢。29はⅢ群aの擂鉢で、9条1組の擂目を有する。30～37はⅣ群の擂鉢。

土師質　38～42はC類[2]の土師質皿。43～45はD2類の皿。46は口径14.8cmを測るD3類皿で、器壁は厚くしっかりとした作りになっている。47は口径8.3cmの上釜である。

瀬戸美濃製品　48は口径5.6cm、器高3.0cmを測る小型の鉄釉碗である。49は高台内に輪トチン痕を残す灰釉皿。50・51は灰釉半鉢で、51は口径25.2cmを測る。

中国製陶磁器　52・53は青磁碗で外面に線描蓮弁文が施される。54は青磁釉が褐色を呈する無文の青磁碗である。55は見込みに「顧氏」の印が施された青磁碗。56は口径9.8cmを測る青磁皿で高台内には白磁釉が塗られている。57は青磁稜花皿。58は見込みに印花文の施された青磁皿。59は青磁瓶の口縁部である。60は同じく青磁瓶で肩部から胴部にかけて葉文や波文が線刻される。釉薬は淡緑色の色調。61は青磁酒会壺の蓋である。62は底径13.0cmを測る青磁盤である。63は端反の白磁皿。64は口径8.6cmを測る小型の白磁皿である。65は端反の染付碗で、66・67はE群[3]に属する饅頭心の染付碗である。68のC群染付碗は見込みに捻花が描かれる。69は外面に唐草文の描かれる染付坏である。70は外面に唐草文、見込みにアラベスク文の描かれた端反のB群染付皿である。71は底径9.2cmを測る染付皿で、内面に花樹が描かれる。72は染付の花盆である。外面には竹や花が描かれ、内面は下半部が露胎となっている。二次的に火を受けており、口縁は金属の覆輪があった痕跡がある。

金属製品　73・74は銅銭。73は祥符元宝、74は皇宋通宝である。

石製品　75は黄白色を呈する砥石。76は硯である。77は笏谷石製バンドコで、78は三足の削り出された風炉である。

飯町地区

本地区では下城戸から真正寺前を通り、道福谷入口へと続く道路遺構を検出した。遺物としてはやはり接合できるものが少なく、出土点数12,704点の内、4,790点が越前焼の製品であった。土師質や陶磁器類は小破片のものが多かった。

越前焼　79は口縁部が完全に肥厚したⅣ群cの大甕である。肩部に田の窯印が施される。80・81は口縁の長く立ち上がる中甕と考えられる。82は口縁部が完全には肥厚していないのでⅣ群aに分類される。83～86は口縁の肥厚したⅣ群cの大甕。87は口径20.0cmを測る小甕で寸胴の形。88は肩が張り凸帯がめぐる小甕である。89も同じく小甕。90は口径15.8cmを測る壺である。91～94も口縁の短く立ち上がる壺である。95・96は小型の壺。97は口径4.7cm、器高11.2cmを測る小型の壺で、肩部に本の窯印を有する。98は壺の底部で、底に寺の印を有する。99～102は口縁が内湾するタイプの鉢である。101は口径15.2cm、器高6.9cmを測る。103～107は平鉢である。103・104・107は内面の一部に扇形の擂目が施される。また、106は波形の擂目が入れられている。108は小型の擂鉢で口径18.3cmを測る。109・111・113はⅢ群bの擂鉢である。110・116はⅣ群、112はⅠ群に分類される。114はⅢ群aの擂鉢で口径32.8cm、器高11.0cmを測る。115はⅢ群bに分類され、口径32.2cm、器高

11.7cmを測る。生焼けで、擂目が摩耗してしまい、後で削って擂目を付けている。117～121の擂鉢は口縁が内傾するⅣ群の擂鉢。122～124はⅢ群a、125・126は擂目が密に入れられることからⅣ群の擂鉢と考えられる。127は口径14.0cm、器高3.2cmを測る卸皿である。128は桶で器壁は薄く、赤褐色の色調で焼きあがり、焼成は良好である。129は口径21.2cmを測る桶。130の桶は口縁部に2本の凹線がめぐる。

土師質土器　131はC_1類の皿である。132～134は手づくね形成のB類皿である。135・136・138～145はC_2類皿。137は口径7.8cm、器高1.9cmを測り、口縁部が真っ直ぐ立ち上がるG類の皿である。146は形あて成形のE類皿で、近世のものである。147～150はD_2類皿。151は口径28.2cmを測る大型の土師質皿である。胎土は白色で強くナデ調整した痕が確認される。152は口径12.3cmを測る土釜である。153は上鈴で、154は口径2.8cm、器高2.5cmを測る小壺である。155は芯押である。

瀬戸美濃製品　156～164は鉄釉碗である。162は釉薬が褐色を呈し釉縮みをおこしている。163は口径16.8cmを測る平碗で、接合はできなかったが164はその底部とみられる。165は鉄釉茶人で底部に糸切痕がみられる。166・167は鉄釉壺で、167は底径10.8cmを測り、釉薬は赤茶色に発色している。168は口径12.2cmを測る灰釉壺である。169～173は灰釉皿である。172は口径8.4cm、器高2.2cmを測り、口縁は内湾し見込みには印花文を有する。174は胴部に竹節状の沈線をめぐらせた灰釉香炉である。175は素焼きの香炉で、口縁と胴部に沈線がめぐる。

中国製陶磁器　176・179・180は線描き蓮弁文の施された青磁碗である。177は無文の青磁碗で、178は見込みに印花文を有する。181は高台の作りが簡略な青磁碗で、見込みに「顯氏」の印が施され、青磁釉は暗緑色に発色する。182は青磁の菊花皿である。183は口径13.0cmを測る青磁稜花皿である。184は見込みに双魚文を有する。185の青磁皿は底径7.0cmを測る。186は青磁香炉で釉薬は暗緑色を呈する。187は淡緑色の釉薬がかかる青磁壺。188は底径20.6cmを測る青磁盤である。189は口径13.2cmを測る白磁碗。190・191は碁笥底の白磁皿である。192は白磁の菊皿である。193・194・196は端反の白磁皿である。195は削り出し高台の白磁皿で、口径8.1cm、器高1.8cmを測る。197は白磁坏である。198は口径6.5cm、器高3.2cmを測る染付坏である。199は見込みに玉取獅子の描かれたB群の染付皿である。200は菊花の描かれた染付皿で高台内に「大明年□」の銘が書かれる。201・202もB群に分類される端反の染付皿である。203は碁笥底の染付皿で外面には芭蕉葉文が描かれる。204は口径22.2cmを測る褐釉壺である。205は口径8.3cmを測る褐釉小壺で、胎土は赤紫色。

朝鮮製陶磁器　206は底径5.2cmを測る蕎麦釉壺である。

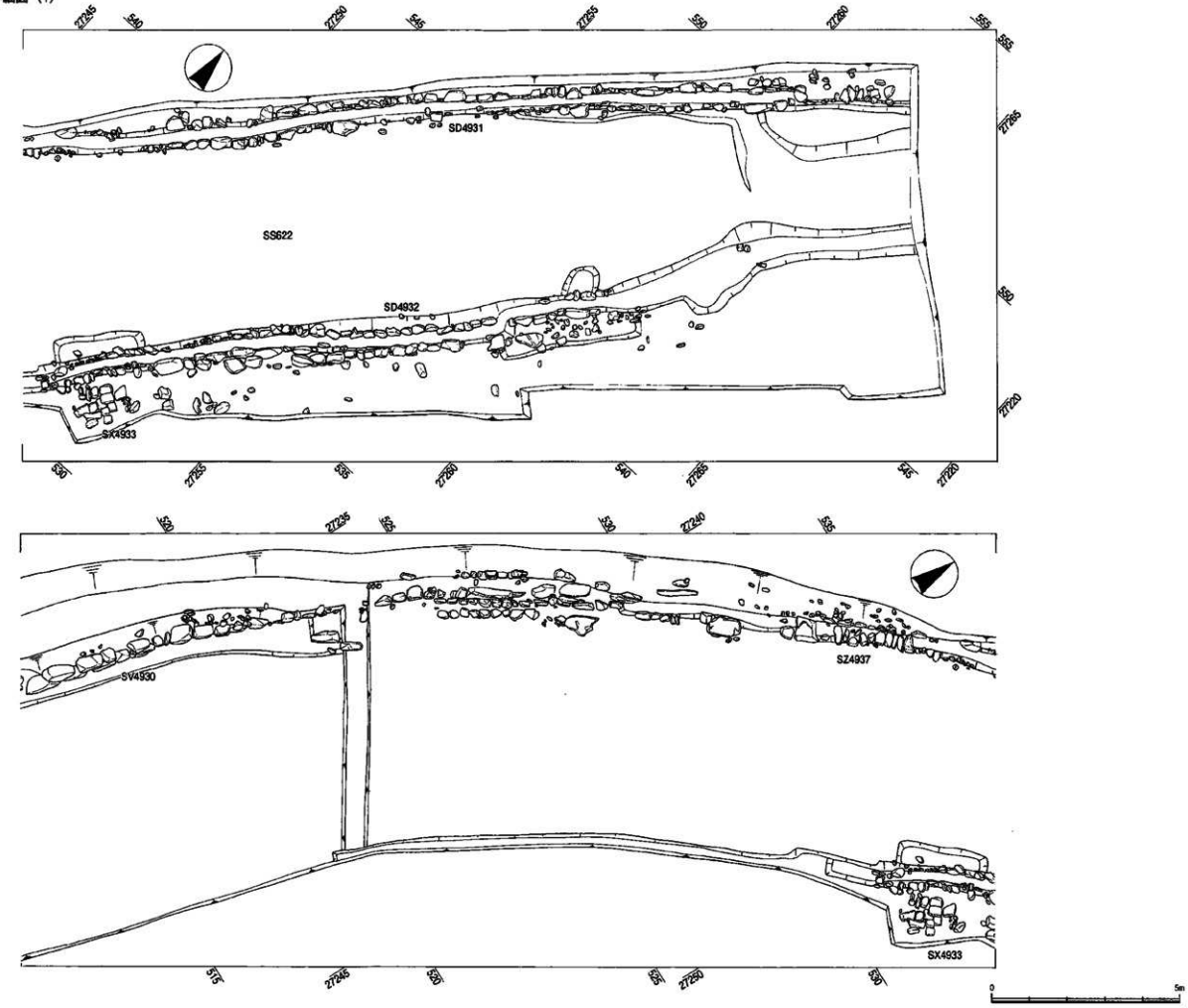
石製品　207は硯である。208～211はバンドコの壷である。208は表に梅花模様が彫刻される小型のバンドコ壷である。212も小型のバンドコの身。213～215はD型のバンドコの身である。216は五輪塔が浮彫りに彫られる板碑。空輪・風輪・火輪それぞれに梵字が彫られる。217も同じく五輪塔が彫られた板碑で、地輪の部分には「□祿／□□大姉／二月朔日」と線刻される。218・219は臼である。

（1）越前焼甕・擂鉢の分類については。『県道鯖江・美山線改良工事に伴う発掘調査報告書』福井県立朝倉氏遺跡資料館　1983年　参照

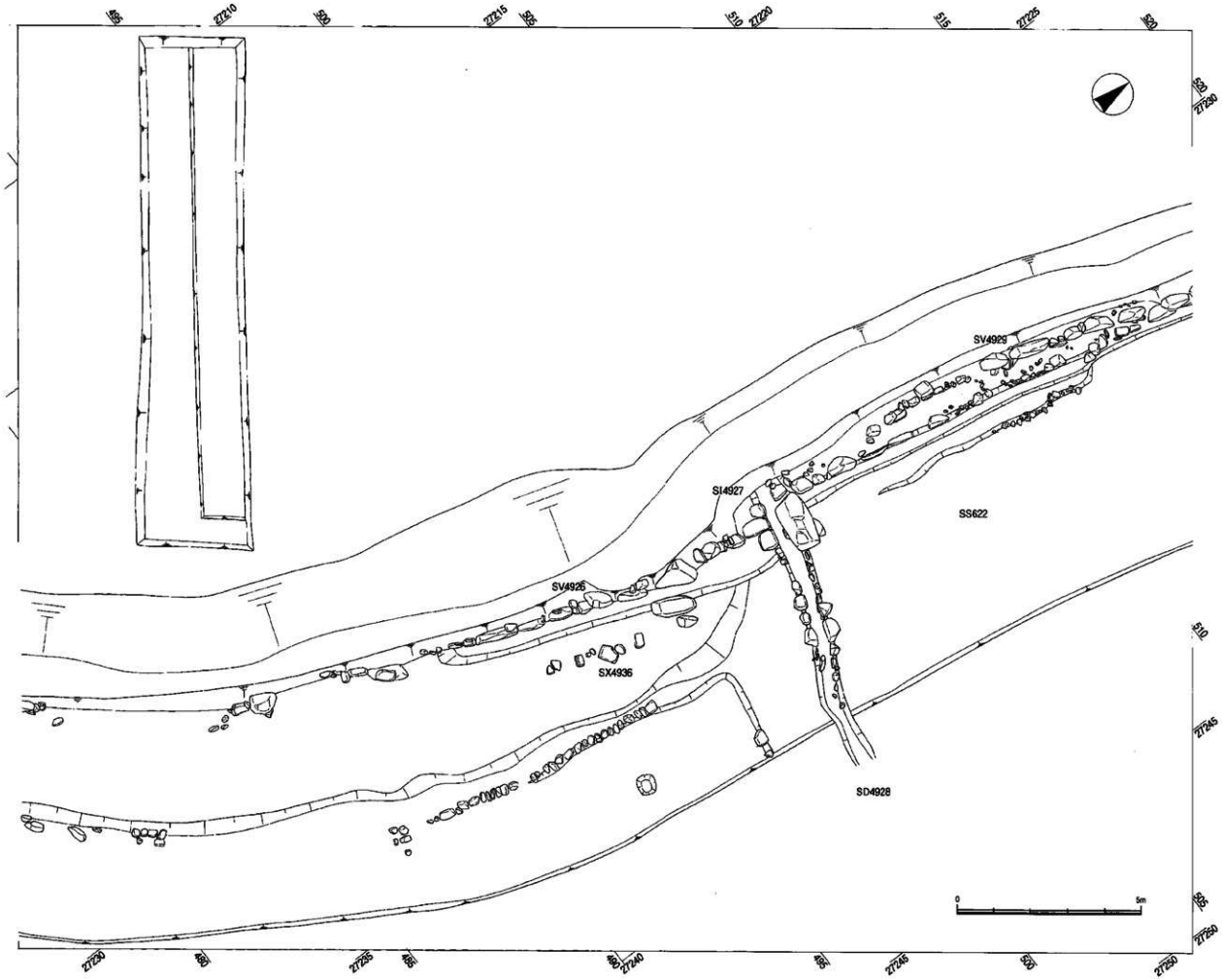
（2）土師質皿の分類については、『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅰ　1979年、および『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告』Ⅶ　1999年　参照

（3）染付の分類については、小野正敏「15、16世紀の染付碗、皿と分類とその年代」『貿易陶磁研究』No.2 日本貿易陶磁研究会　1982年　参照

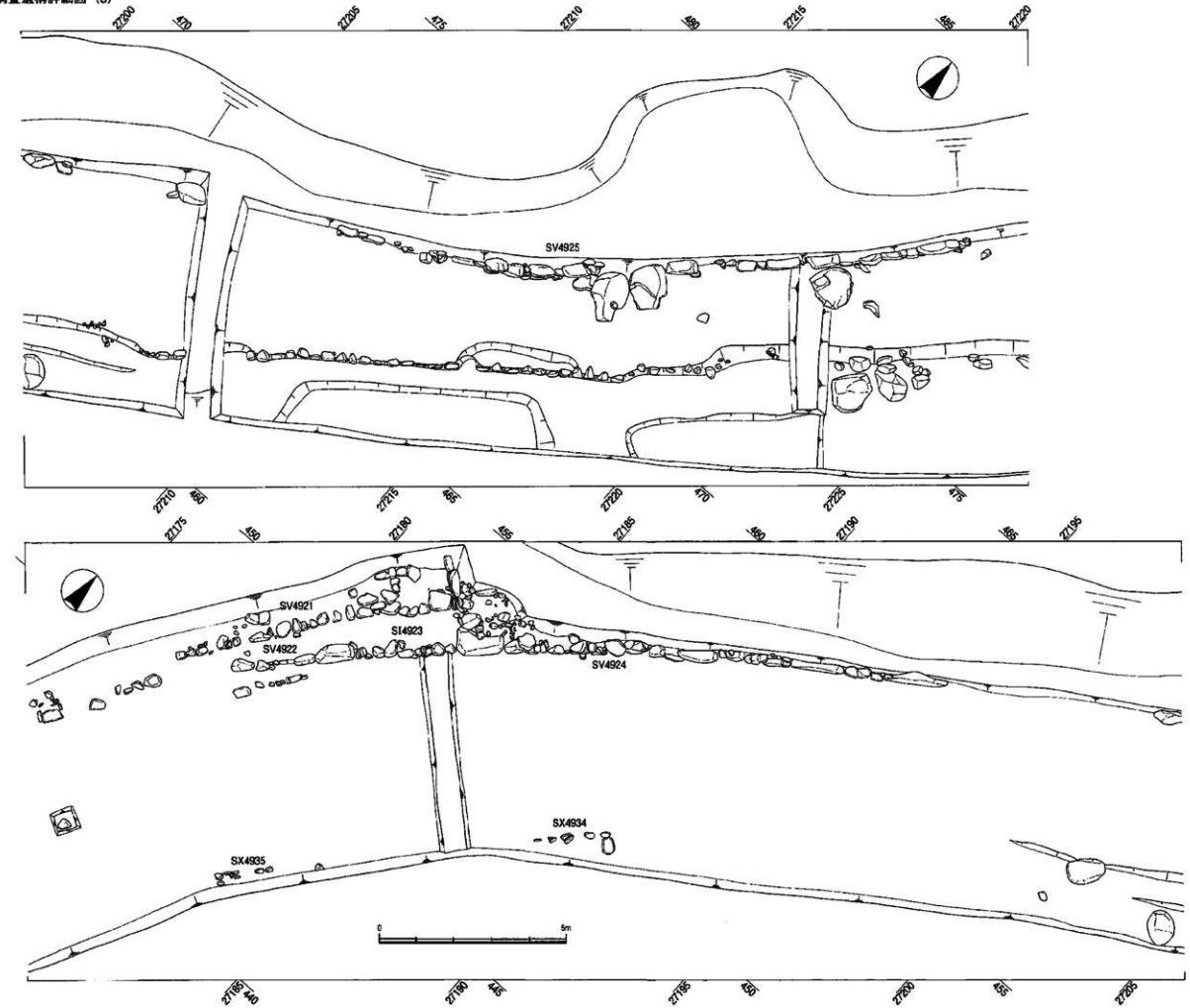
第１図　第108次調査遺構詳細図（1）



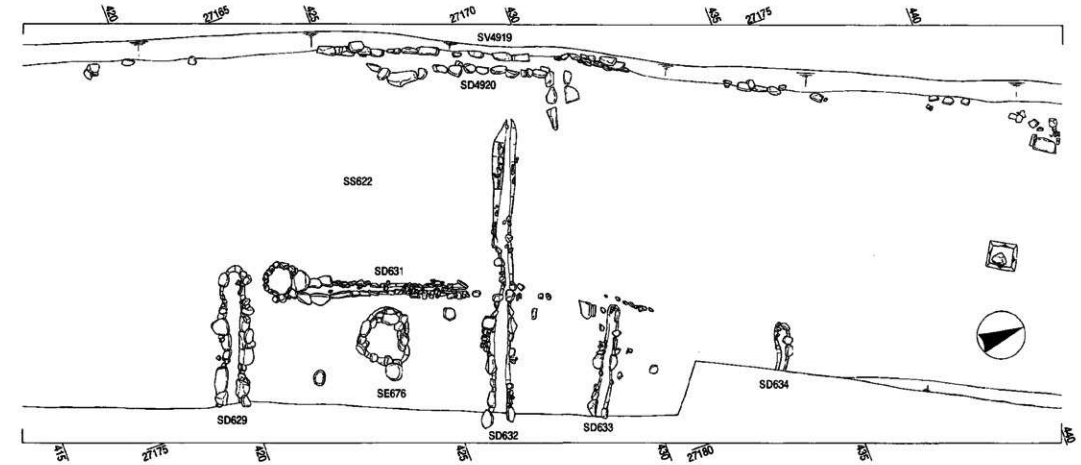
第２図　第108次調査遺構詳細図（2）

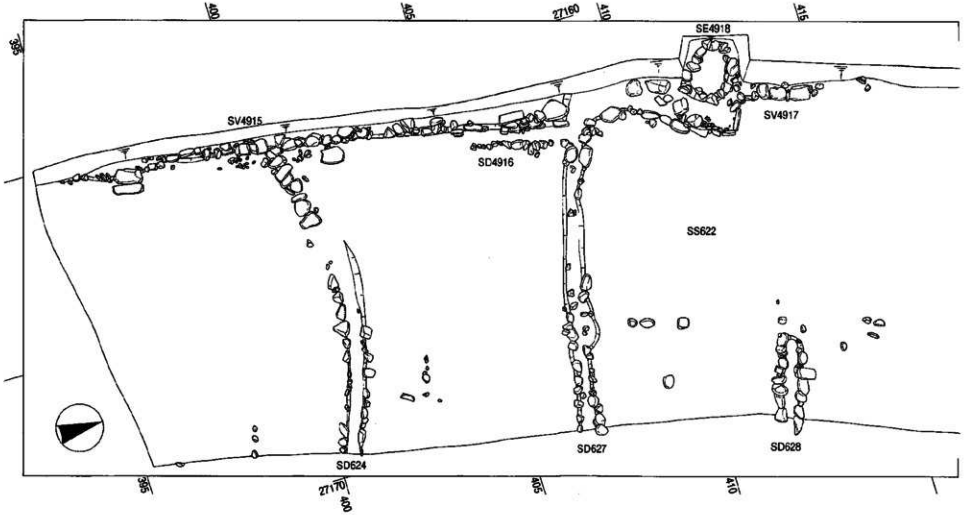


第３図　第108次調査遺構詳細図（3）

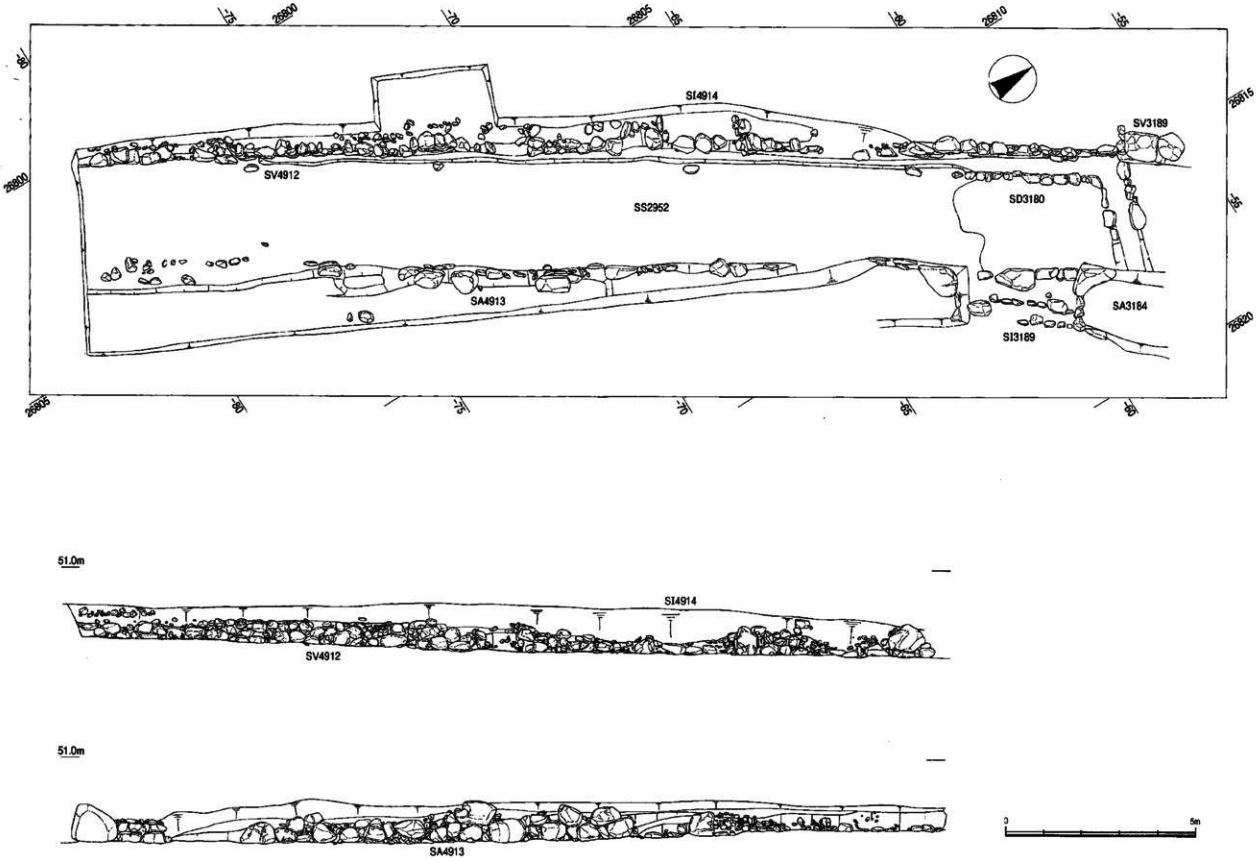


第４図　第108次調査遺構詳細図（4）

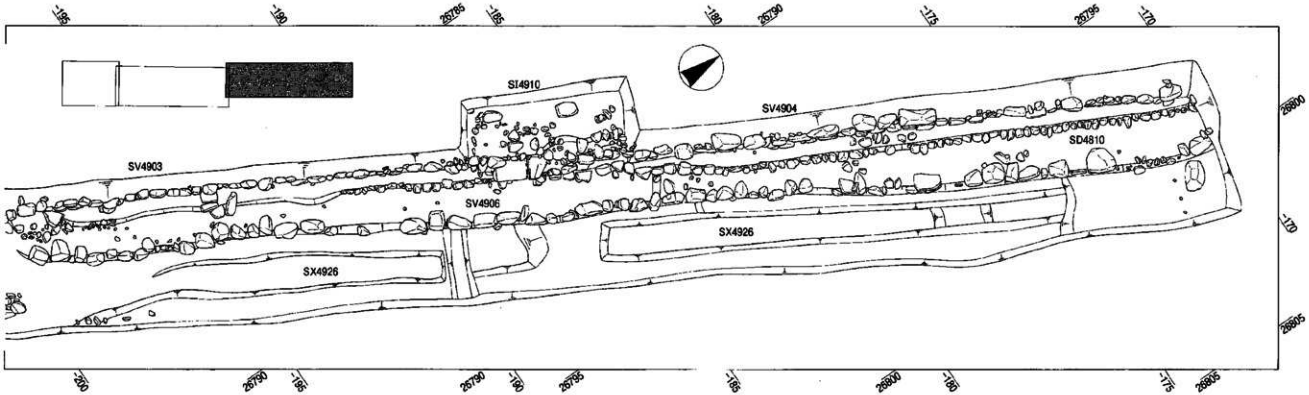


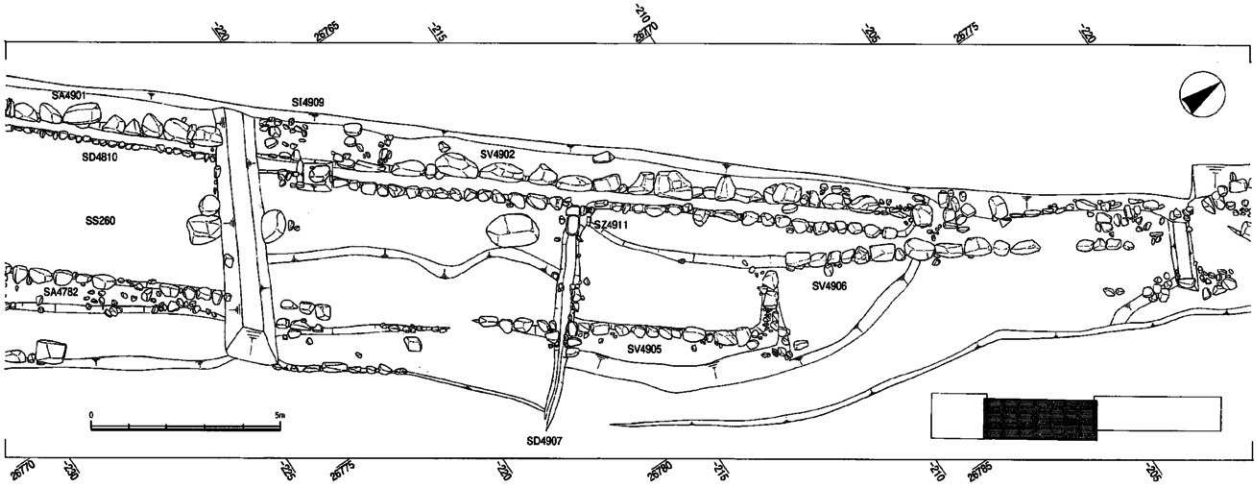


第５図　第108次調査遺構詳細図（5）

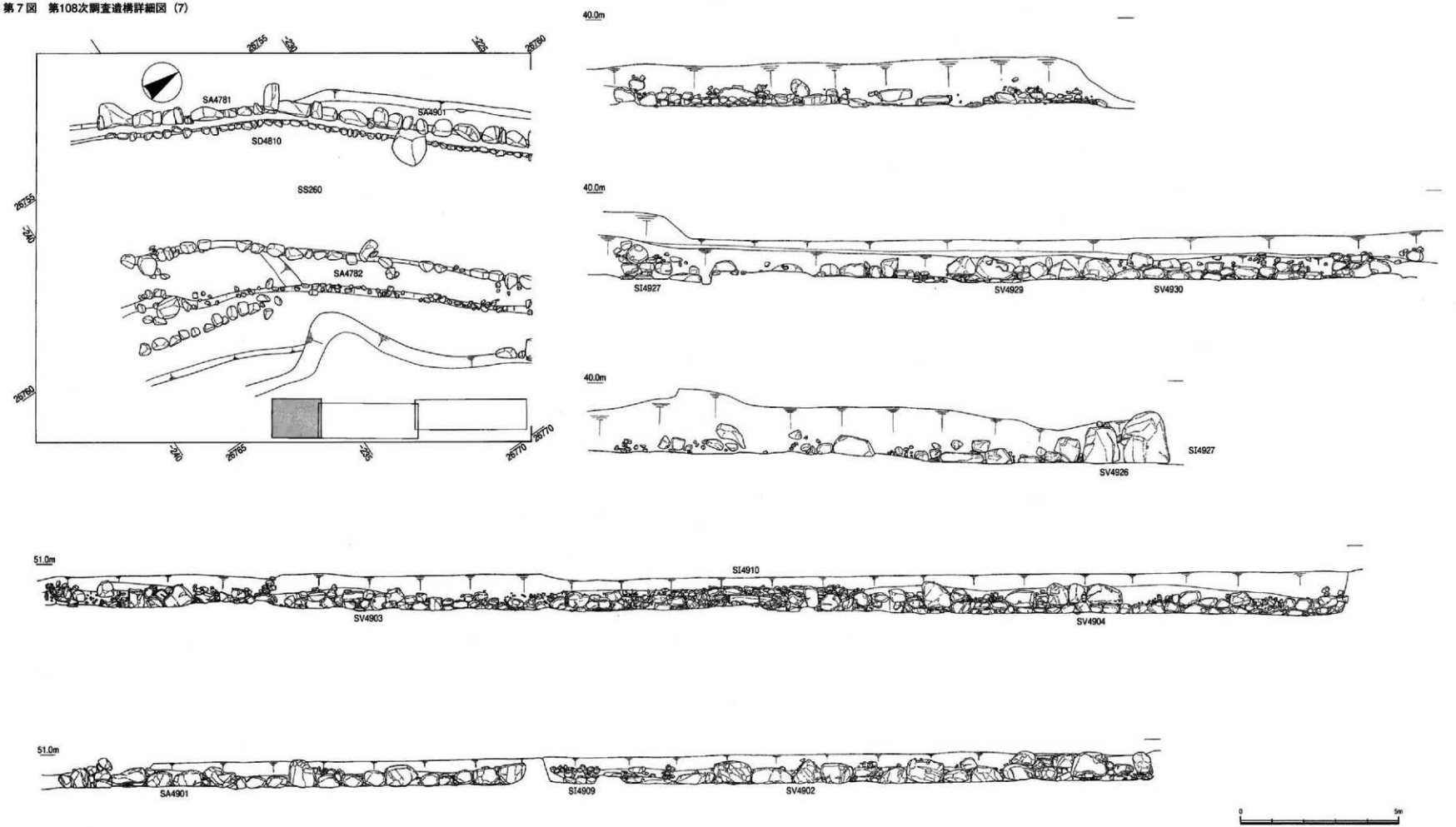


第６図　第108次調査遺構詳細図（6）





第７図　第108次調査遺構詳細図（7）



調査区全景
SS260
（南から）

SS260
（北から）

第108次調査字木蔵地係

SV4903、4904、4906
(南から)

調査区全景
SV4904、SD4810
SV4906、SX4926
(北から)

調査区全景
SS2952
（南から）

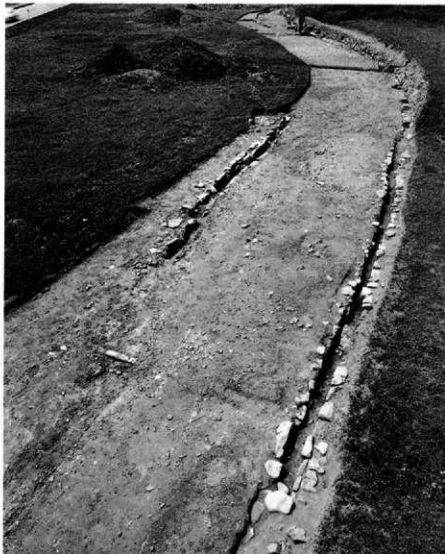
調査区全景
SS2952
（北から）

第108次調査字飆町地係

SS622
（南から）

SS622
（北から）

SS622、SV4926
SI4927、SD4928
（南から）



SS622、
SD4931、4932
（北から）

第108次調査字下城戸地係

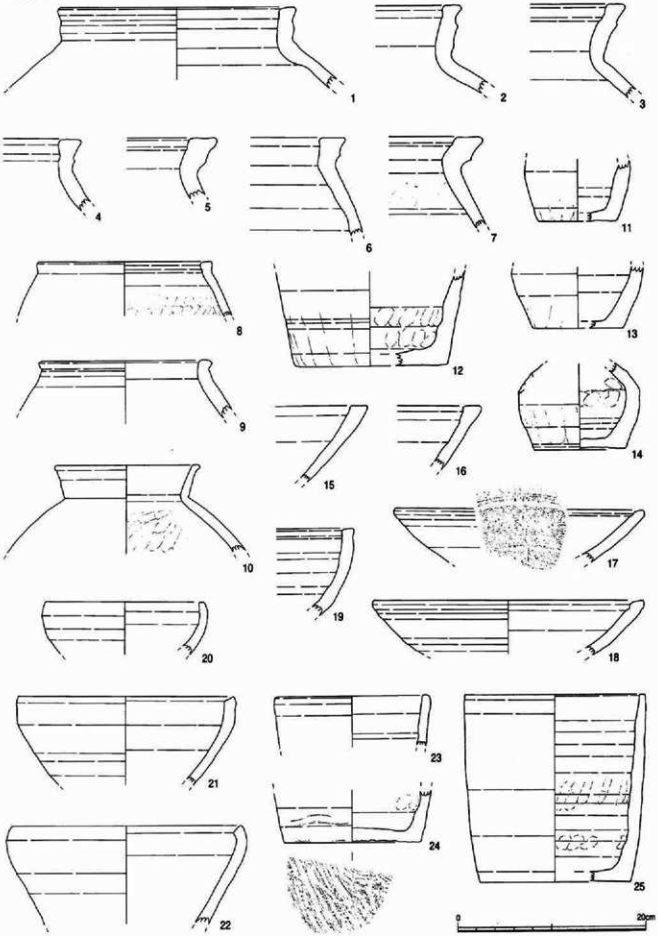
SI4910
(東から)

SI4914
(東から)

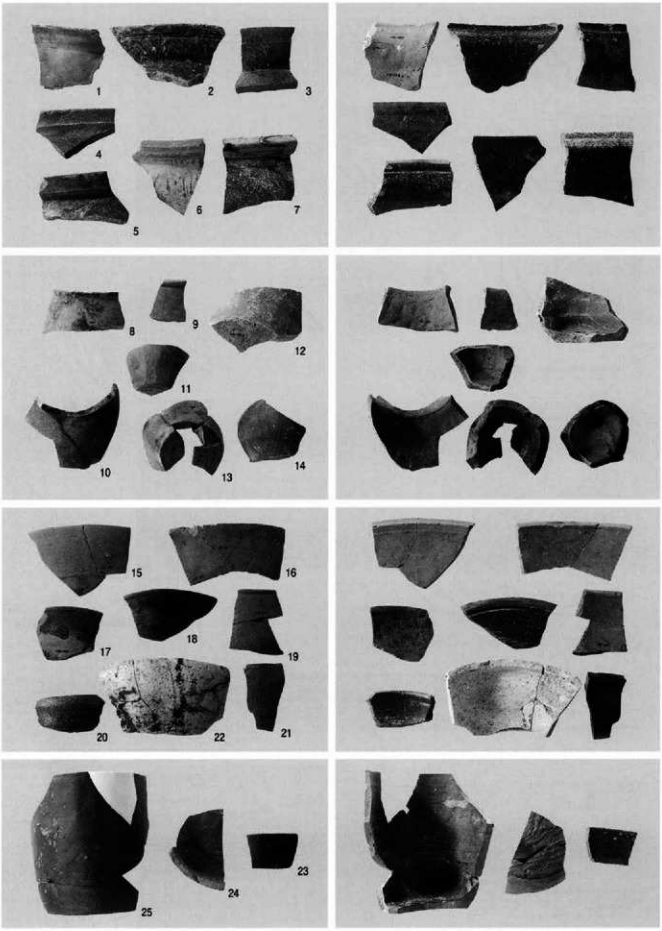
SI4927、SD4928
(東から)

第８図　第108次調査出土遺物（1）

八地谷地区



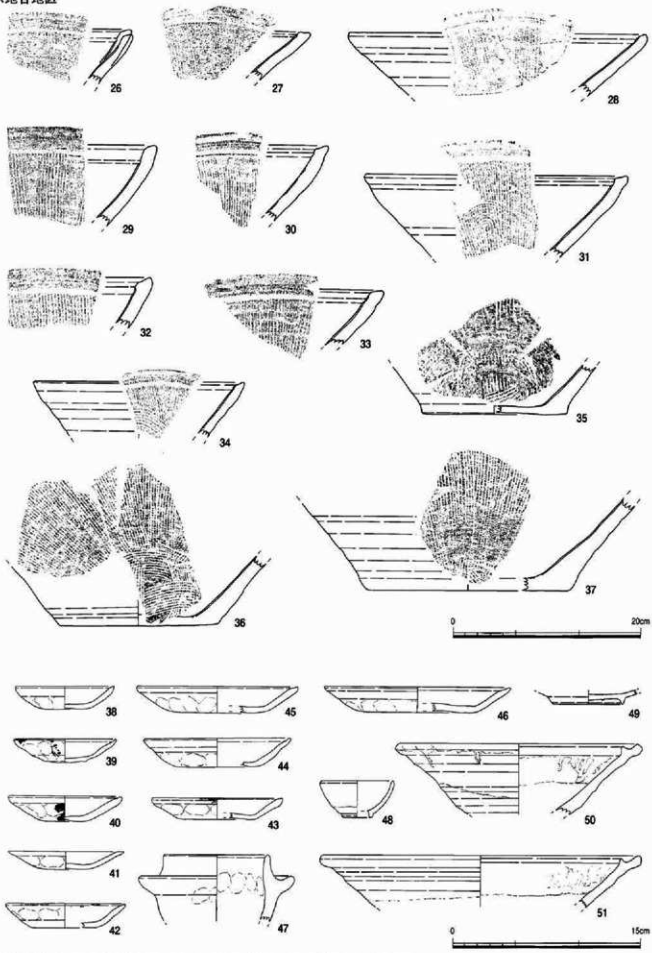
越前焼壺 1～9　壺 10～14　鉢 15～22　桶 23～25



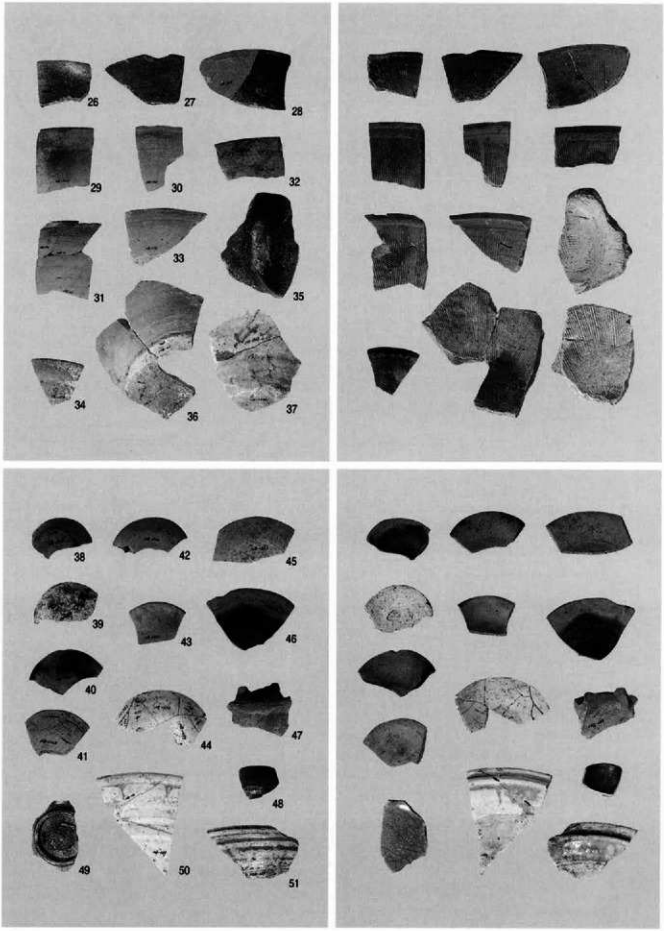
八地谷地区　越前焼壺 1～9　壺 10～14　鉢 15～22　桶 23～25

第９図　第108次調査出土遺物（2）

八地谷地区



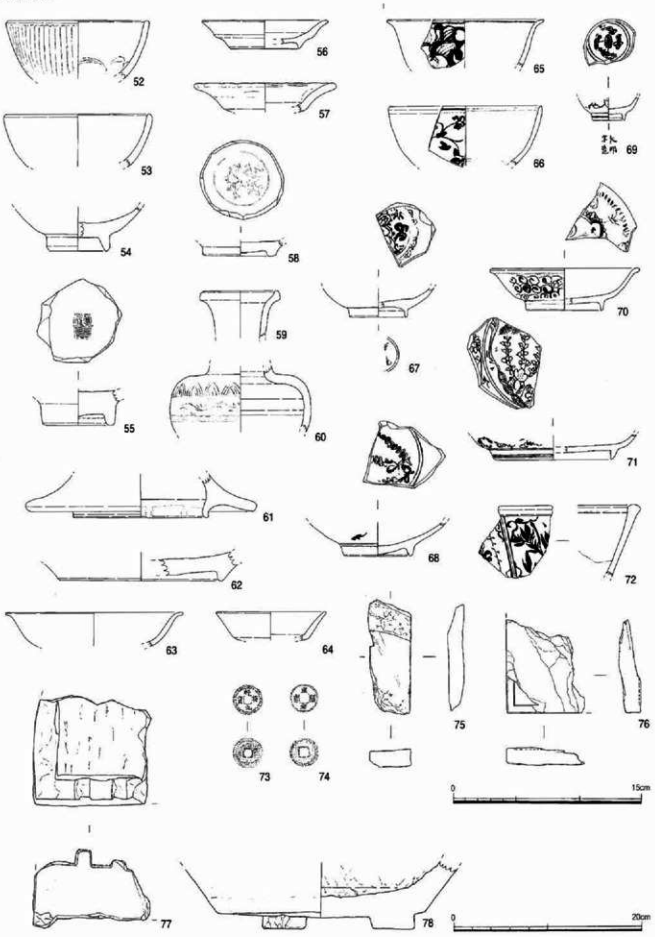
越前焼擂鉢 26～37　土師質皿 38～46　土釜 47　鉄釉碗 48　灰釉皿 49　鉢 50・51



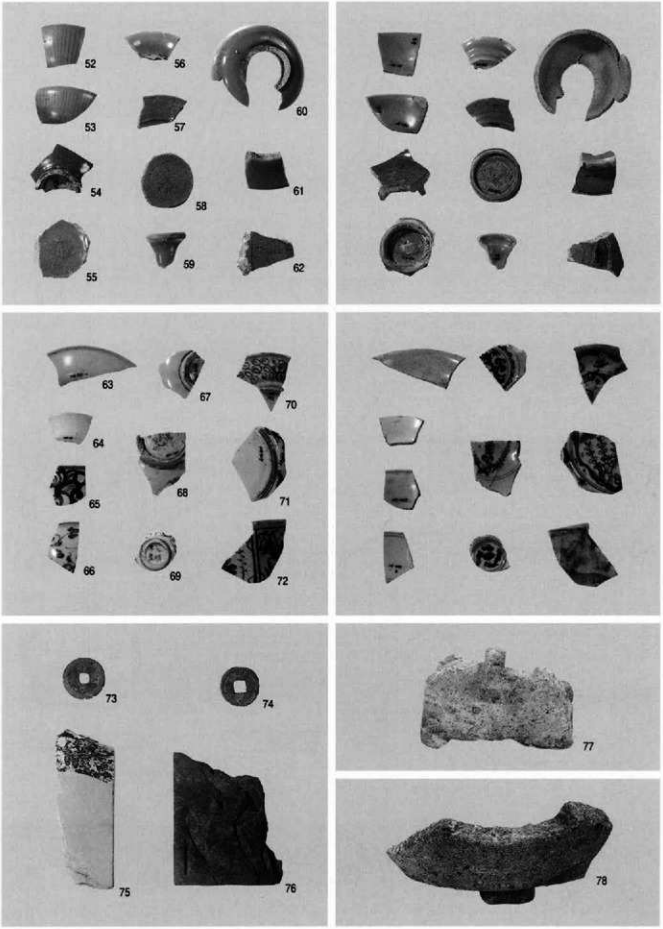
八地谷地区　越前焼擂鉢 26～37　土師質皿 38～46　土釜 47　鉄釉碗 48　灰釉皿 49　鉢 50・51

第10図　第108次調査出土遺物（3）

八地谷地区



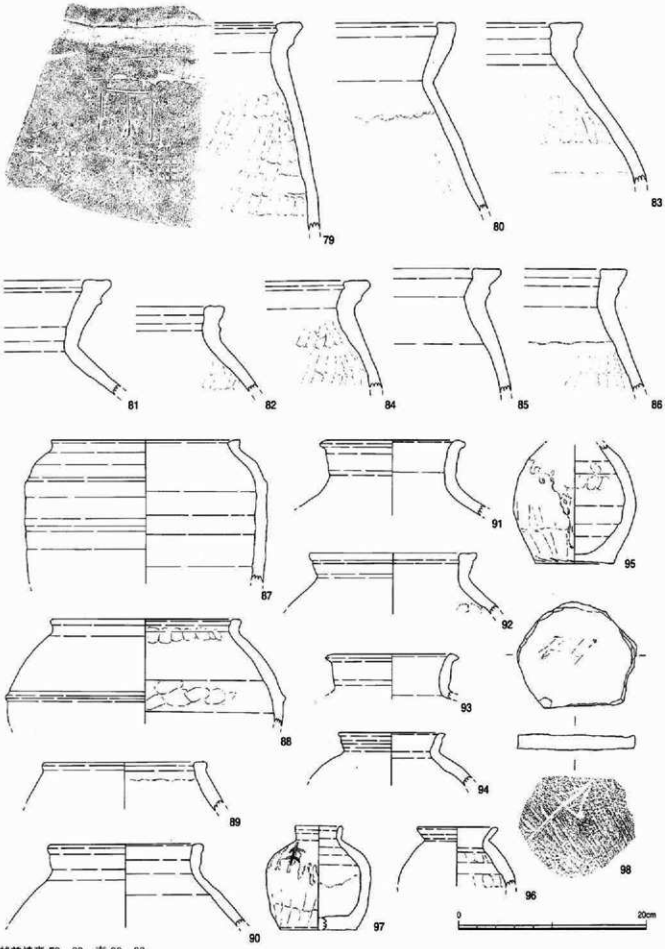
青磁椀 52～55　皿 56～58　瓶 59・60　酒会壺 61　壺 62　**白磁**皿 63・64　染付椀 65～68　坏 69　皿 70・71
花盆 72　**金属製品**銅銭 73・74　**石製品**砥石 75　硯 76　パンドコ 77　風炉 78



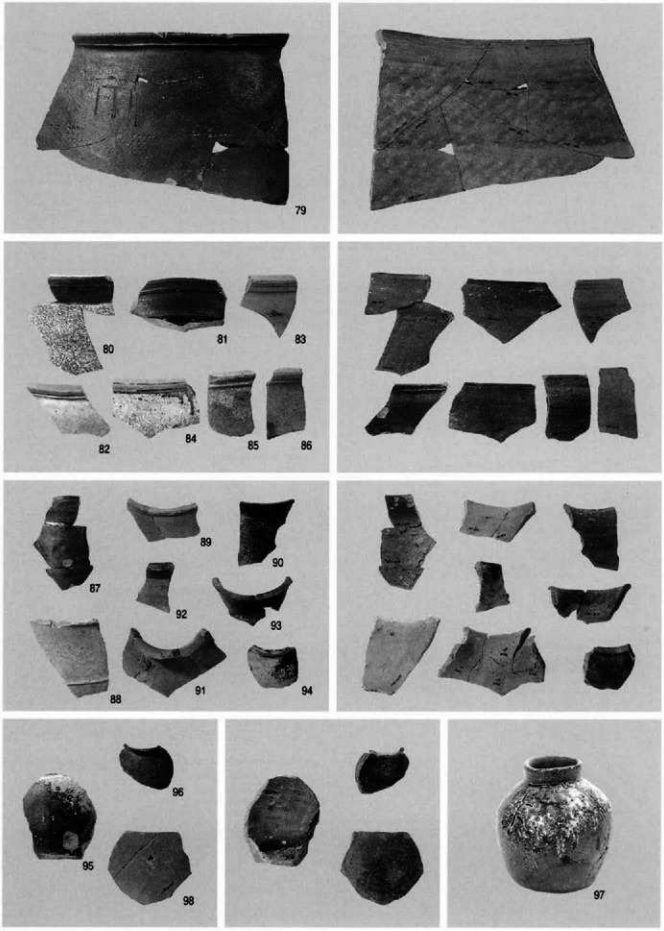
八坂谷地区　**青磁**碗 52～55　皿 56～58　瓶 59・60　酒会壺 61　盤 62　**白磁**皿 63・64　染付碗 65～68　坏 69　皿 70・71　花盆 72　**金属製品**銅銭 73・74　**石製品**砥石 75　硯 76　パンドコ 77　風炉 78

第11図　第108次調査出土遺物（4）

瓢町地区



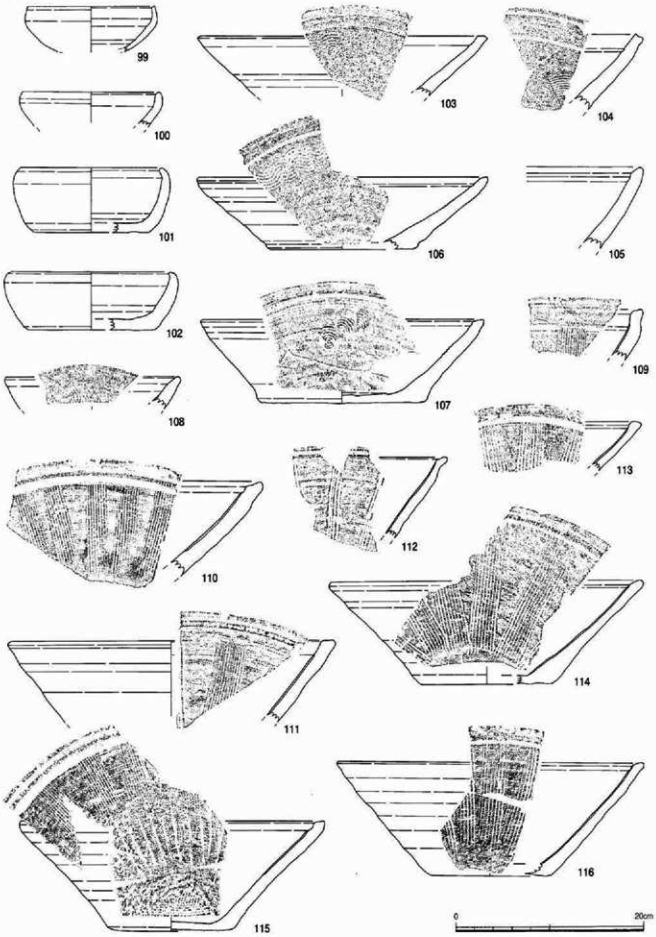
越前焼壺 79～89　壺 90～98



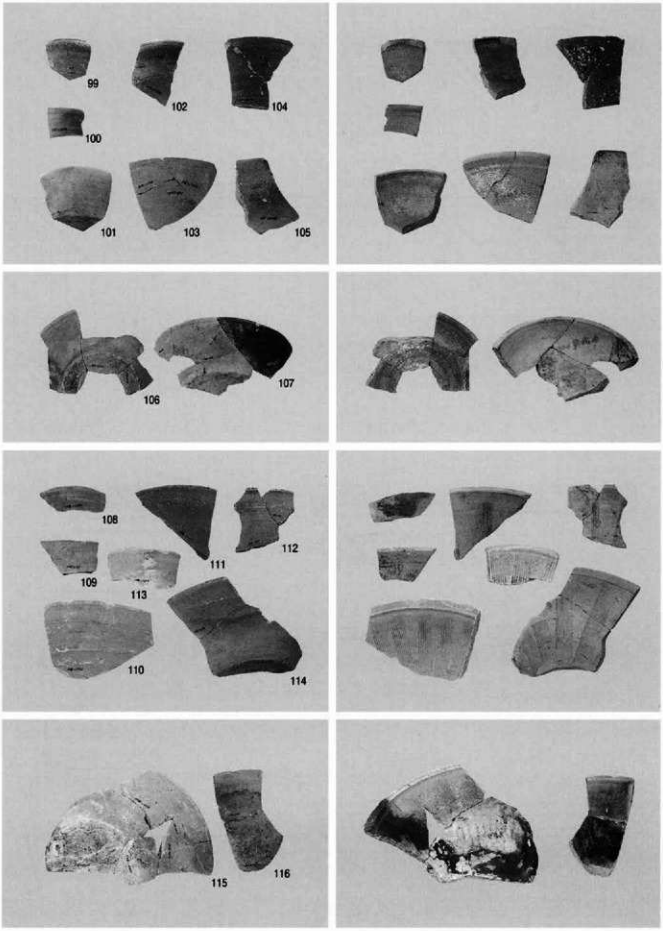
瓶町地区　越前焼壺 79～89　壺 90～98

第12図　第108次調査出土遺物（5）

瓢町地区



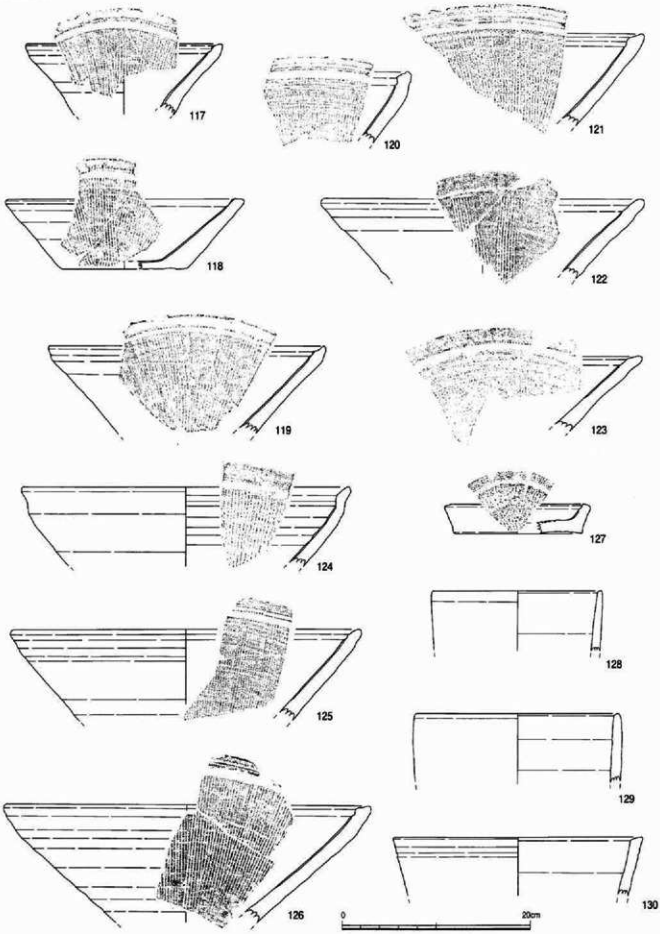
越前焼鉢 99～107　擂鉢 108～116



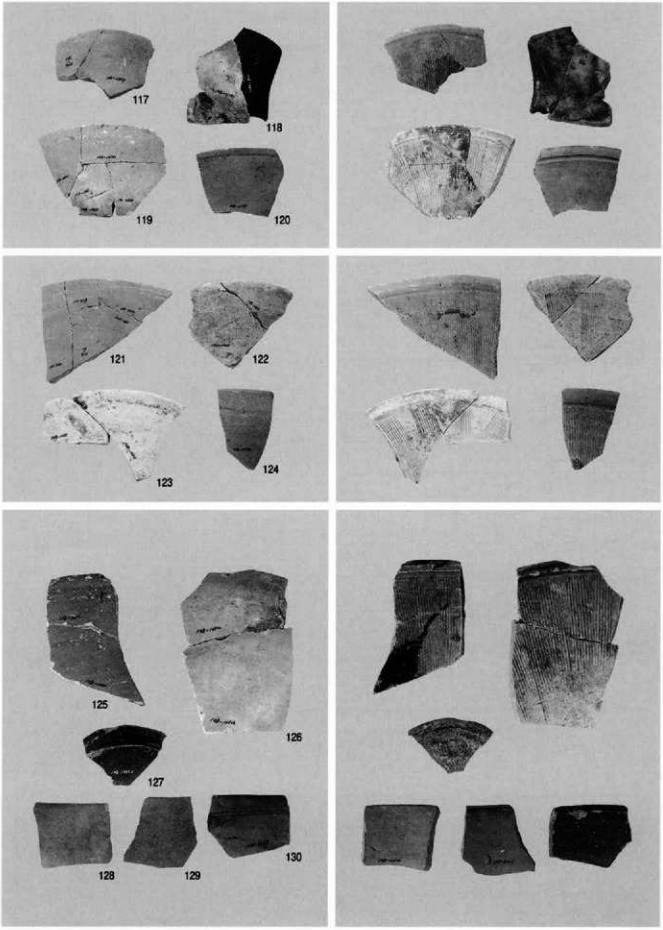
[瓢町地区]　越前焼鉢 99～107　擂鉢 108～116

第13図　第108次調査出土遺物（6）

瓢町地区



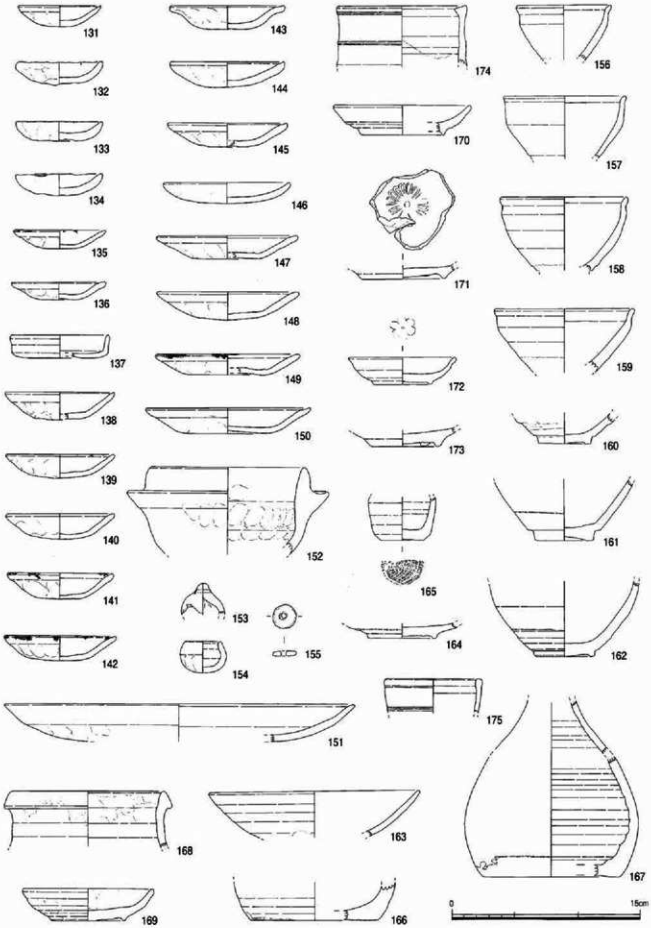
越前焼擂鉢 117～126　卸皿 127　桶 128～130



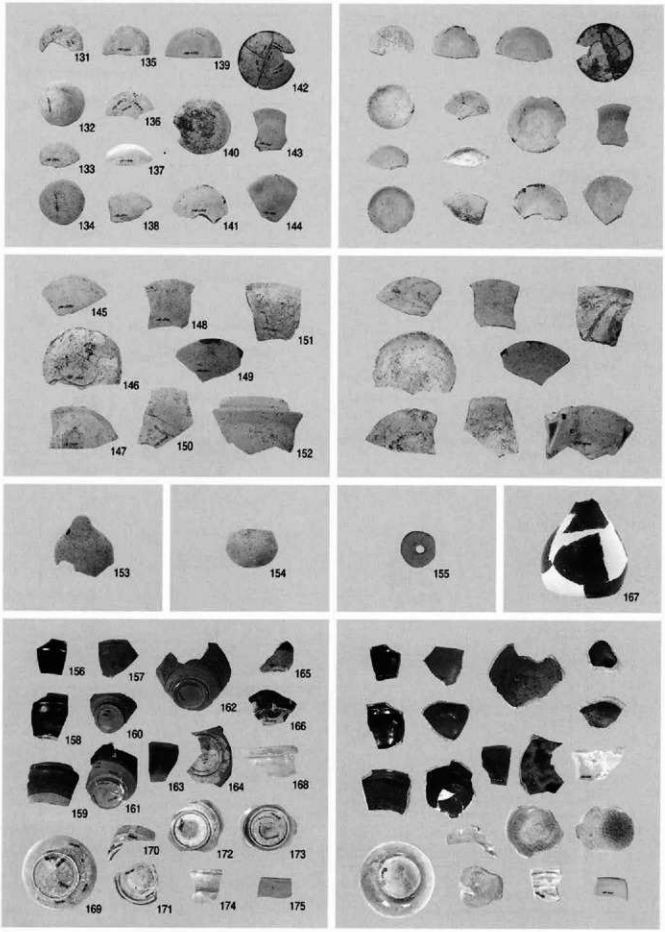
[概町地区] 越前焼擂鉢 117～126　卸皿 127　桶 128～130

第14図　第108次調査出土遺物（7）

瓢町地区

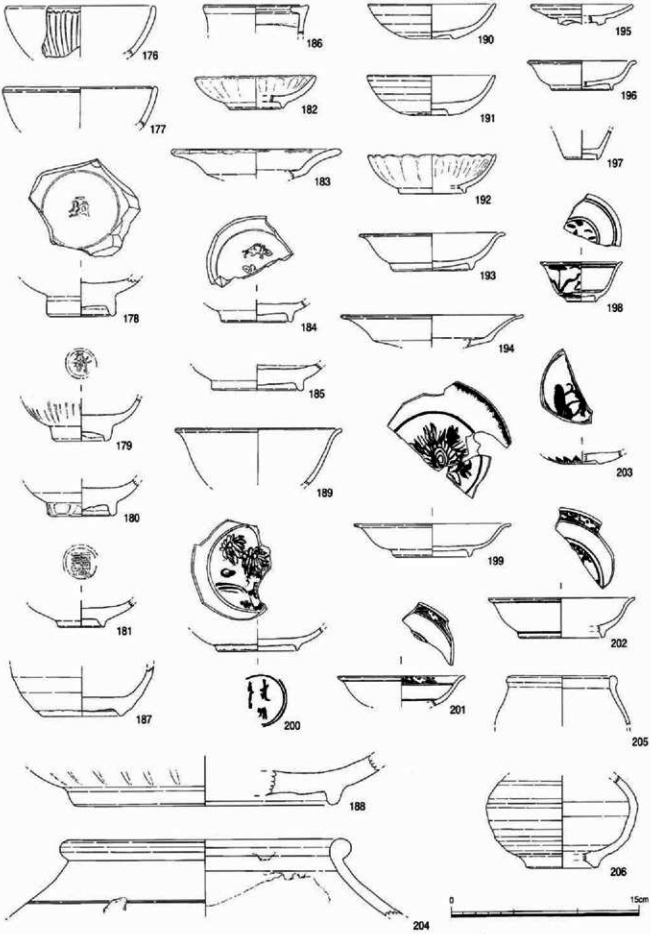


土師質皿 131～151　土釜 152　土鈴 153　小壺 154　芯押 155　鉄釉碗 156～164　茶入 165　壺 166・167　灰釉壺 168
皿 169～173　香炉 174・175

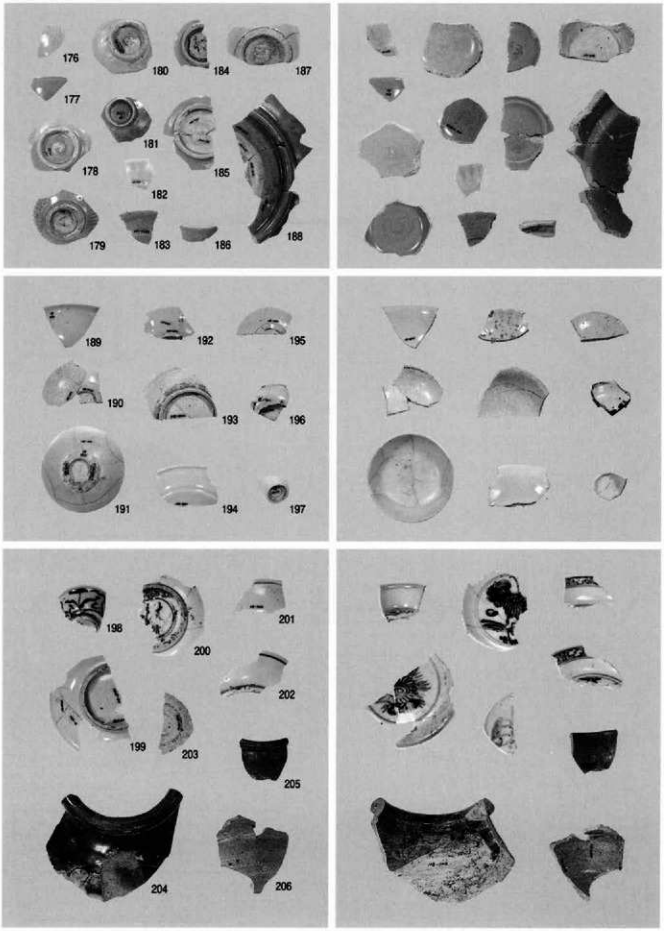


瓶町地区　**土師質**皿 131～151　土釜 152　土鈴 153　小壺 154　芯押 155　**鉄釉**碗 156～164　茶入 165　壺 166・167
灰釉壺 168　皿 169～173　香炉 174・175

第15図　第108次調査出土遺物（8）
瓢町地区



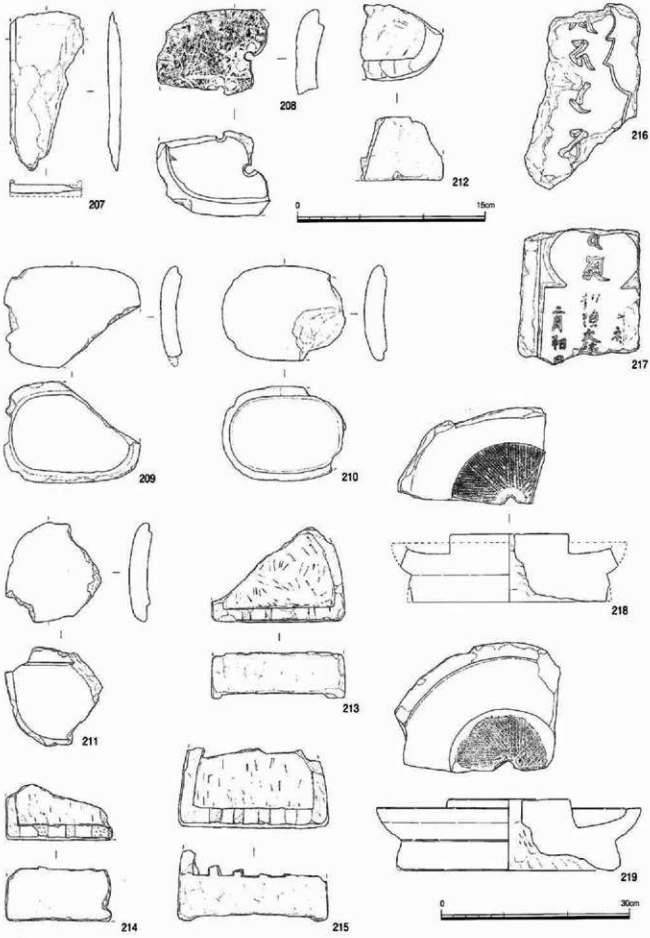
青磁碗 176～181　皿 182～185　香炉 186　壺 187　盤 188　白磁碗 189　皿 190～196　坏 197　染付坏 198　皿 199～203
褐釉壺 204・205　朝鮮製壺 206



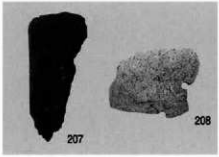
[氣町地区]　**青磁**碗 176～181　皿 182～185　香炉 186　壺 187　鉢 188　**白磁**碗 189　皿 190～196　坏 197　**染付**坏 198　皿 199～203　**褐釉**壺 204・205　**朝鮮製**壺 206

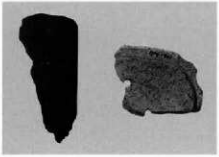
第16図　第108次調査出土遺物（9）

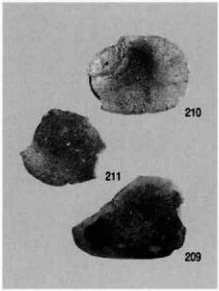
瓢町地区

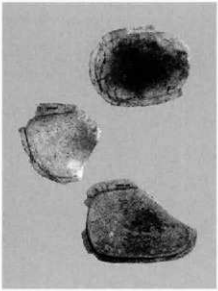


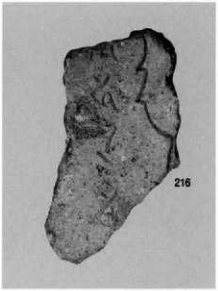
石製品硯 207　バンドコ 208～215　板碑 216・217　臼 218・219

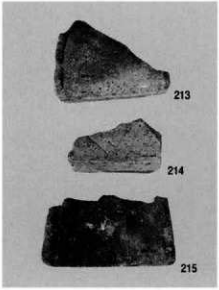


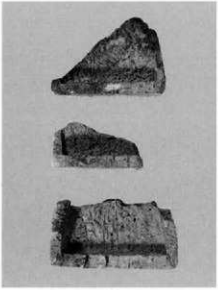


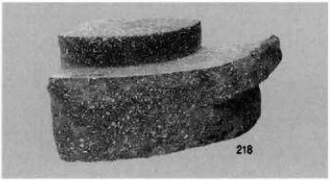


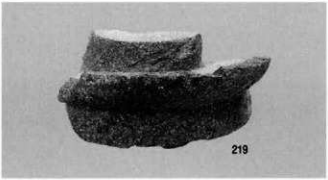












町地区　石製品硯 207　バンドコ 208～215　板碑 216・217　臼 218・219

Ⅲ　第　110・111　次　調　査

Ⅲ　第110・111次調査

1．調査地区の環境

挿図3を見ても理解されるように、本調査区は約40年に及ぶ一乗谷朝倉氏遺跡の発掘調査においても比較的調査の希薄な地区であり、調査がおこなわれても調査面積自体が狭小であることから地区全体としての町並の実体が不明な地区である。このことは、当該地区の大部分が特別史跡の指定範囲外であるため、年度別計画調査がおこなわれていないことに起因するものである。以下に、周辺地区の概要について調査次数別に概観する。

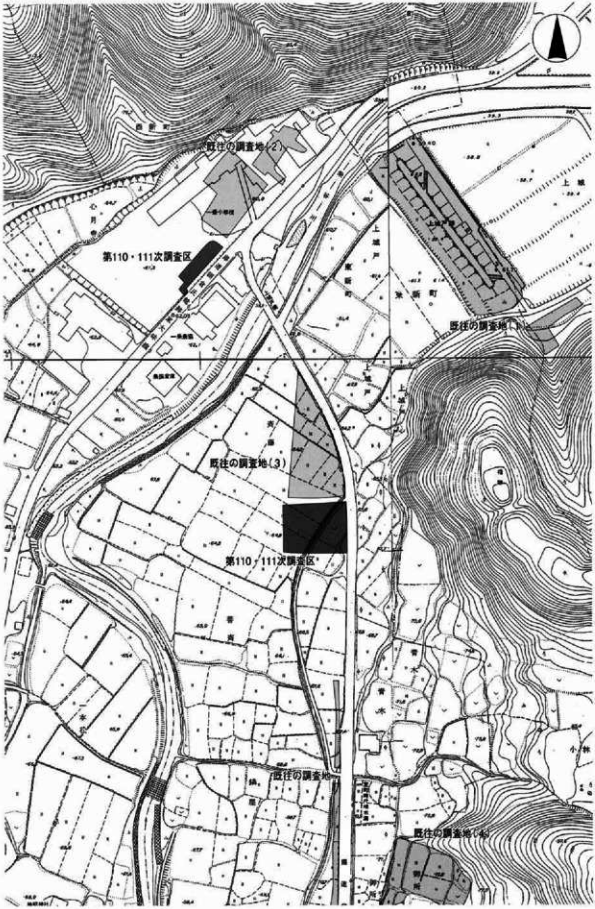
第61・62次調査地点（1）　基底部幅20.0m、長さ105.0mを測る土塁施設であり、土塁南側には土塁と平行する形で幅12.0m、深さ3.0m前後を測る外濠を有する。城下町の内側と外側を区画する重要な施設であり、上城戸と呼ばれる。上城戸と対になる下城戸は、上城戸より約1.6km北に位置している。今回の調査区は城戸の外側に位置する。

第16・28・55次調査地点（2）　一乗小学校の改築に伴い3回の調査がおこなわれている。調査の結果、土塁を持つ屋敷や、町屋と考えられる小規模な区画が道路に面して整然と配置されていることが確認されたことから、城戸の外側においても計画的な町作りがおこなわれていたことが判明した。

第28次調査地点（3）　第110次発掘調査区の北側に位置し、本来は同一の屋敷内であるものと考えられるが、110次調査区から連続する遺構は検出されていない。特筆されるのは、調査区中央付近で屋敷を区画する東西方向の幅4.2m、深さ1.2mを測る素掘りの濠が検出されていることであり、このことから本区画が大規模な屋敷の一部であることが理解される。

第92次調査地点（4）　本地点は調査の結果、後世の土地改良に伴う削平が大きく遺構の状態は不良であり、区画内の様相については不明な点が多い。しかしながら、本地点と西側隣接地点に字名として「御所」「御所口」が残っているため、永禄10～11年（1567～68）にかけての9ヶ月間、後の室町幕府15代将軍となった足利義昭が滞在した屋敷跡と推定されている。

（1）『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告7』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　1999年
（2）『一乗谷朝倉氏遺跡　一乗小学校校舎改築に伴う事前調査報告書』福井市教育委員会　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　1986年
（3）『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡10　昭和53年度発掘調査整備事業概報』朝倉氏遺跡調査研究所　1979年
（4）『特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡　平成7年度発掘調査環境整備事業概報26』福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館　1996年



挿図3　第110・111次調査区周辺地形図（1/2000）

2．遺　　構（第17～18図、PL.16～20）

第110次調査

本調査区は東西約34.0m、南北約27.0mを測り、面積は約918m²である。遺構全体図を見てもあきらかなように、調査区内東南隅に他の遺構面よりも約1.0m程高い遺構面を有する。調査時の所見では、この高台上の遺構面は地山を削りだして整形していた。また、後述するSD4986やSB4989という主要遺構と配置方向が一致することから、これらが計画性を持って配置されたことが理解される。以下に各遺構ごとの概要を記す。

SK4981　西側約半分を欠失している。短軸0.9m、深さ0.1mを測る。

SK4982　南端が調査区外に伸びているため長軸は不明だが、短軸1.2m、深さ0.23mを測る。

SK4983　西側約半分を欠失している。短軸0.7m、深さ0.16mを測る。

SK4984　直径0.35m前後、深さ0.1mを測り、形状から柱穴と考えられる。

SK4985　直径0.5m前後、深さ0.05mを測る。

SD4986　調査区を南西方向から北東方向へ斜めに横断する溝であり、幅0.4m、検出延長は23.5mを測る。東側2.5mには、高台の裾線が平行して走る。また、後述する多くの遺構が本溝と平行関係にあることから、屋敷内部の基本的な主軸方向を示すものと想定される。全体を通して底部の1石のみしか残存しておらず、特に西側石列の残存状態が不良で、一部を除いては検出できなかった。

SB4987　SD4986と後述する建物SB4989に挟まれた細長い掘建柱建物である。柱間は5.5mを測る柱穴3ヶ所を確認したにすぎない。

SX4988　後述するSB4989と平行する石列であり、延長15.4mを検出した。多くは直径0.3～0.4mを測る石を1列に配石しているが、南側では小型の石を用いている。SB4989と一体構造を持つものと考えられる。

SB4989　延長18.5m・幅2.0mを測る細長い石敷施設である。直径0.3m以下の扁平な石を帯状に敷詰め、その両側面に直径0.4m前後の扁平な石を1.8～2.2m間隔で配置している。本遺跡において類似構造を持つ遺構は過去に確認されていないが、屋根を持つ通路遺構であると考えられる。

SE4990　直径0.9mを測る井戸であるが、安全上のため完掘していないため、深さは不明である。依存状態は良好で、扁平な天場石が揃った状態での検出であった。

SK4991　直径1.0m、深さ0.04mを測る土壙であり、土壙内には直径0.3m以下の石を充填している。

SD4992　調査区北西コーナーにおいて検出した幅0.4mを測る溝であり、確認長は6.7mを測る。南半分では東側の側石を欠失していた。本遺構も先に述べたSB4989と同方向を向いている。

SX4993　SD4992と平行する形の石列であり、延長4.5mを検出した。

SB4994　依存状態が悪く、不整形を呈した石敷施設施設であり、残存長2.3m、残存幅1.5mを測る。南側石の面が揃っていることから、この部分のみは旧状を留めているものと考えられ、先に述べたSB4989と直角方向で接続するものと想定される。

SF4995　方形の石積施設であり、長軸1.4m、短軸0.9mを測る。北側石の残存状態は悪く石が崩落していたものの、他の3辺の依存状態は良好であり、3段の積上げを確認することができた。

第111次調査

本調査区は、第16・28・55次調査地区の東側に隣接する地区である。先に「調査地区の環境」の項において述べたように、本地区は道路を基準として大小の屋敷が整然と建ち並んだ地点であることが判明していた。本調査では調査区が防火用水槽とその配管の幅に限られていたため、最大幅6.7m、延長34.0m、面積150m²であった。このため、明瞭な屋敷の区画を検出するには至らなかった。しかし、後述するSB5002という全面石敷の蔵跡を検出できたことが、過去における調査所見から調査地点が比較的規模の大きな屋敷の一部であることが特定された。また、調査区北側半分は現地表面より最大で1.0mを掘り下げたが、遺構面は残存しておらず、砂質土と砂利の堆積で覆われており、東側に流路を持つ一乗谷川の氾濫源であることが確認された。以下に各遺構ごとの概要を記す。

SD5001　調査区南端で検出した溝であり、幅0.2mを測る。

SB5002　蔵跡である。長軸4.0mを測るが、短軸は調査区域外に伸びているため不明である。側面には0.2～0.5mを測る石を立てた状態で配置し、その内側全面には直径0.3m前後を測る扁平な石を敷き詰めている。南側中央部には幅1.2m、長さ0.8mを測る出入り口と考えられる張り出し部が付属する。

SB5003　SB5002の西側に建つ掘建柱建物である。柱穴間が2.75mであることから柱間9尺の建物を想定できる。

SK5004　直径0.75m、深さ0.1mを測る略円形を呈する土壙であり、穴内には石が充填されている。

SK5005　直径0.7m、深さ0.11mを測る円形を呈する土壙である。SK5004と同様に穴内には石が充填されている。

SK5006　長さ1.95m、深さ0.02mを測る楕円形を呈する土壙であるが、一部が調査区域外に伸びているため幅は不明である。

SK5007　直径0.5m、深さ0.04mを測る土壙である。

SK5008　直径1.1m、深さ0.51mを測る円形土壙であり、周囲には石が不規則に並んでいたものの性格は不明である。

SK5010　直径1.1m、深さ0.34mを測る円形土壙である。

SK5011　約半分が調査区域外に伸びているため、大きさは不明であるが、深さは0.31mを測る。

SX5009　調査区を横断する形で検出された石列である。部分的に欠失した部分が存在しているが、本来は連続していたものと想定される。調査区西端において検出された石材が最も大きく幅1.0mを測り、他は直径0.3m前後の石である。石列の面は北側を向いて揃えられていることから、SB5002を含む屋敷区画の境界を示す石列と考えられる。

3．遺　　物（第19～20図、PL.21～23）

第110次調査

第110次発掘調査により出土した遺物は破片総点数5,353点を数え、その内訳は表２に示すとおりである。この中で、土師質の製品が74.03％も含む点が大きな特徴と言え、本区画が周囲に濠を巡らす大規模屋敷の一部分であることと性格的に関連するものと考えられる。

大別	細別	器種	点数	%	大別	細別	器種	点数	%	細別	器種	数量	%
日本製	越前焼	甕	493		中国製	青磁	碗	69		金属製品	銅銭	2	
		壺	116				皿	31			釘	13	
		鉢	71				鉢	3			火鉢	2	
		擂鉢	193				盤	12			鏃	1	
		椀	3				香炉	2			小刀	4	
		小計	876	16.36%			壺	1			その他	3	
	土師質	皿	3,939				小計	118	2.20%	金属製品合計		25	0.47%
		土釜	23			白磁	碗	3		石製品	バンドコ	14	
		土鍋	1				皿	44			硯	3	
		小計	3,963	74.03%			坏	4			砥石	7	
	鉄釉	碗	50				小計	51	0.95%		盤	6	
		瓶	2			灰釉	碗	34			鉢	2	
		鉢	5				皿	39			臼	3	
		壺	23				坏	2			風炉	2	
		水滴	1				小計	75	1.40%		石仏	1	
		茶入れ	1			瑠璃釉		1	0.02%		板碑	2	
		香炉	2		中国製合計			245	4.58%		石がん	1	
		仏花瓶	1		朝鮮製		碗	1			その他	14	
		小計	85				壺	2		石製品合計		55	1.03%
	灰釉	碗	12		朝鮮製合計			3	0.06%	木製品	角材	1	
		瓶	21								ヘギ板	1	
		鉢	8		輸入陶磁器合計			248	4.63%		漆片	2	
		小計	41	0.77%							その他	6	
	瓦質	風炉	17							木製品合計		10	0.19%
		香炉	3										
		瓦燈	3										
		鉢	6										
		その他	6										
		小計	35	0.65%									
	染付	碗	6										
		壺	2										
		小計	8	0.15%									
	須恵器		3	0.06%									
	その他		4	0.07%									
日本製合計			5,015	93.69%						総合計		5,353	100.00%

表２　第110次調査出土遺物一覧

越前焼　１・２は埋土出土の大形甕の口縁部片であり、１は２より古相を呈するタイプである。３は遺構面出土の鉢であり、体部が外反する特徴を有する。口径21.6cm、器高は13.6cmであり、体部内面には押さえのための指頭圧痕が残る。４はSD4986出土の体部が大きく内湾する鉢である。口

径18.0cm、器高6.8cmを測る。5は埋土出土の壺の口縁であり、口径15.0cmを測る。6・7ともに擂鉢で、埋土からの出土である。6は口径37.0cm、器高13.2cmを測る擂鉢である。内面には13条1単位の摺目を有し、口縁部には片口を有する。7は口径30.2cm、器高11.0cmを測り、体部内面には9条1単位の摺目を有する擂鉢である。

土師質土器　今回報告する土師質皿は遺構面を覆う炭混じり黒褐色土からの出土である。8は口径20.8cm、器高2.9cmを測る大形のものであり、数量的には最も少ないタイプである。9は口径15.0cm、器高2.2cmを測り、体部外面下半には不明瞭な指頭圧痕を残している。10は口径13.6cm、器高2.2cmを測る。体部外面下半に指の押さえによる整形を施した後、口縁部を強い横ナデ調整している。11は口径13.6cm、器高2.3cmを測る。整形・調整手法は10と同じである。12は口径13.4cm、器高2.1cmを測る。13は口径13.8cm、器高2.1cmを測り体部下半に2段の指頭圧痕を有する。14は口径6.9cm、器高1.8cmを測り、最も小型のタイプである。15は口径12.2cm、器高1.8cmを測り、直線的でやや薄手の作りである。口唇部内外面には煤が付着していることから、灯明皿として用いられていたことがわかる。16・17は中型のものであり、本遺跡では最も普遍的なタイプである。16は口径12.0cm、器高1.9cmを測る。体部下半には不明瞭な指頭圧痕が認められ、口唇部内外面には煤が付着している。17は口径10.4cm、器高2.3cmを測り、体部下半内外面には整形時の指頭圧痕が明瞭に残る。また口唇部内外面には煤が付着している。18は口径9.3cm、器高1.9cmを測る。体部外面には不明瞭な指頭圧痕が残る。19は羽釜であり、遺構面を覆う炭混じり黒褐色土からの出土である。口径10.0cmを測るが、底部を欠失しているため器高は不明である。体部内外面には整形時の指頭圧痕が明瞭に残っている。

瓦質灯明台　20はSD4986からの出土であり、胴部最大径は18.0cmを測る。

瀬戸・美濃焼　21～23は灰釉陶器である。21は埋土より出土した口径12.2cm、器高6.6cmを測る碗である。22はSD4986からの出土であり、口径14.4cm、器高3.9cmを測る大形の皿である。23は遺構面からの出土であり、口径6.8cm、器高1.3cmを測る小形の皿である。24・25は鉄釉の天目茶碗である。24は遺構面出土で口径12.2cmを測る。体部には厚い釉が認められる。25は遺構面を覆う炭混じり黒褐色土からの出土であり、口径12.0cm、器高6.2cmを測る。釉厚は薄い。

中国製陶磁器　26～31は青磁である。26・27は遺構面を覆う炭混じり黒褐色土からの出土である。26は口径14.2cm、27は口径11.2cmを測り、ともに体部外面には線描蓮弁文を描く。28は埋土からの出土であり、口径10.6cmを測る。体部外面には線描蓮弁文を描いている。29・30は皿であり、ともに埋土からの出土である。29は口径6.7cmを測る小形品であり、30は口径11.4cmを測るもっとも普遍的な口径のタイプである。31は口径5.6cmを測る小形の香炉である。32～34は白磁である。32は埋土からの出土であり、口径15.0cmを測る。内湾しながら立ち上がる体部は口縁部で強く外反する。33は口径10.8cmを測る皿であり、埋土からの出土である。本遺跡では普遍的なタイプである。34は遺構確認面からの出土であり、口径6.2cmを測る坏である。35～37は染付である。35・36はともに埋土から出土した碗である。35は口径13.4cmを測り、体部外面には退化した樹木が描かれており、本遺跡ではもっとも後出するタイプである。36は口径12.0cmを測り、体部外面には唐草文を有する。37は口径11.6cmを測る端反りの皿であり、体部外面には牡丹唐草文を描く。

金属製品　38は全長約30.0cmを測る鉄製の火鉢である。

石製品　挿図4は笏谷石製の風炉である。外面はよく磨かれており、内面には斜方向のノミ跡が残る。

挿図4　第110次調査出土遺物

第111次調査

第111次発掘調査で出土した破片総点数は、僅かに169点を数えるのみであり、その内訳を表3に示す。報告する遺物は全て埋土からの出土である。

大別	細別	器種	点数	%	大別	細別	器種	点数	%	細別	器種	点数	%
日本製	越前焼	壺	14		中国製	青磁	碗	8		金属製品	鍋	1	
		壺	7				小計	8	4.73%	合計		1	0.59%
		鉢	4			染付	碗	1		石製品	硯	2	
		擂鉢	16				小計	1	0.59%	合計		2	1.18%
	土師質	小計	42	24.26%	中国製合計			9	5.33%				
		皿	112		朝鮮製		壺	1					
		小計	112	66.27%	合計			1	0.59%				
	鉄釉	碗	3										
		小計	3		輸入陶磁器合計			10	5.92%				
日本製合計			156	92.31%						総合計		169	100.00%

表3　第111次調査出土遺物一覧

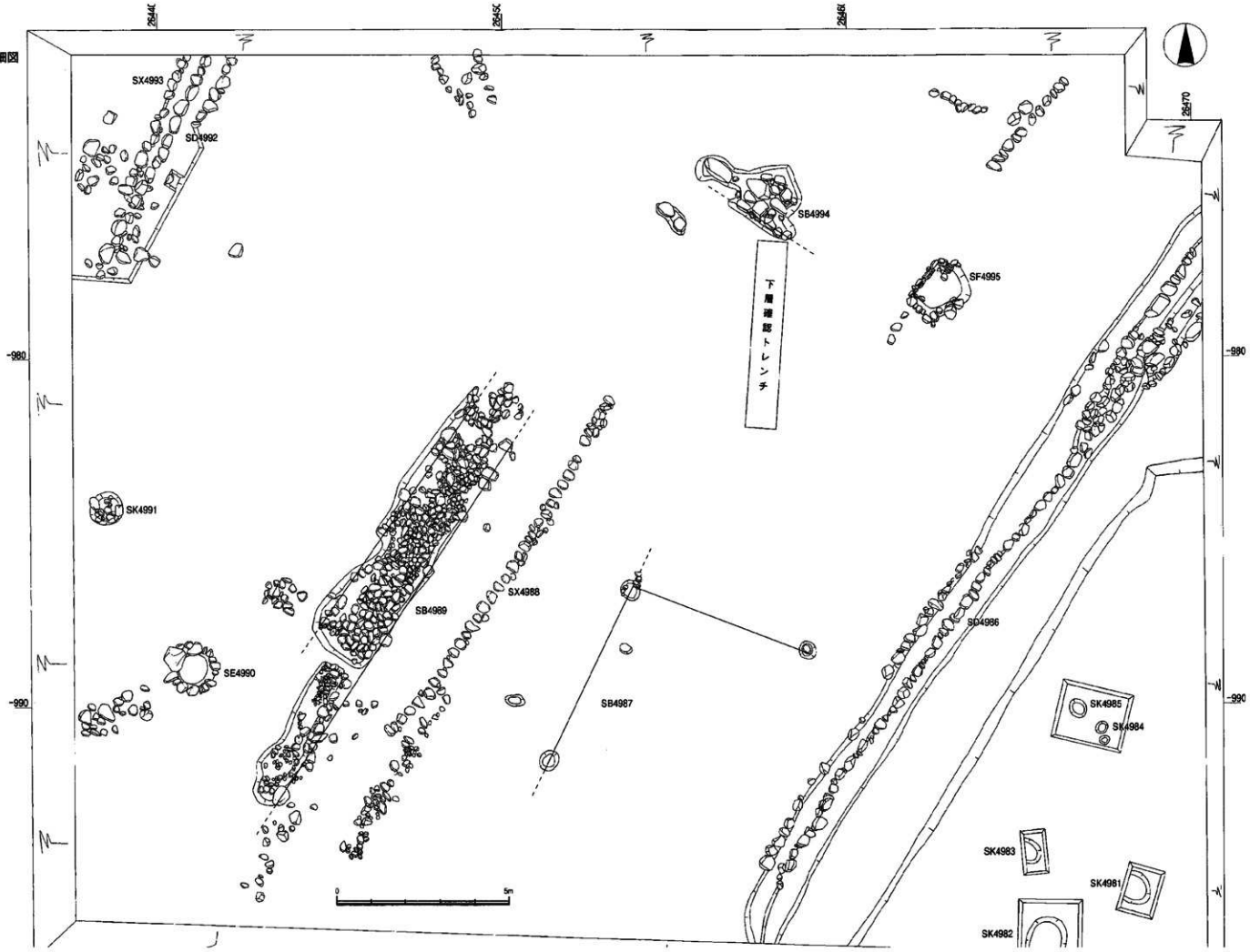
越前焼　1・2ともに擂鉢であり、1は口径38.0cmを測り、内面には13条を1単位とする摺目を有する。2は口径26.4cmを測る口縁部内側には、不明瞭ながらも1条の凹線が巡っている。

土師質土器　全て皿である。3は口径16.8cm、器高2.8cmを測り、体部下半外面には不明瞭な指頭圧痕が認められる。口唇部内側は回転摘み上げ調整をおこなっていることから、薄く仕上げられている。4は口径12.4cm、器高2.9cmを測る。体部外面下半に指の押さえによる整形を施した後、口縁部を強い横ナデ調整している。5は口径11.6cm、器高2.5cmを測る。3と同様に口唇部内側は回転摘み上げ調整をおこなっていることから、薄く仕上げられている。6は口径9.0cm、器高2.1cmを測る口縁部内外面に煤が付着していることから、灯明皿として使用していたことがわかる。7は口径6.5cm、器高1.6cmを測る。

瀬戸・美濃焼　8は口径10.2cmを測る鉄釉碗である。釉は茶褐色を呈している。

朝鮮製陶器　9は徳利形を呈する無釉陶器である。体部内面には指による押さえの跡が認められる。

第17図
第110次調査遺構詳細図



第110次調査区全景

調査区全景
（南から）

◀SK4981～4985全景
（東から）
▶SB4994近景
（北から）

SF4995近景（東から）

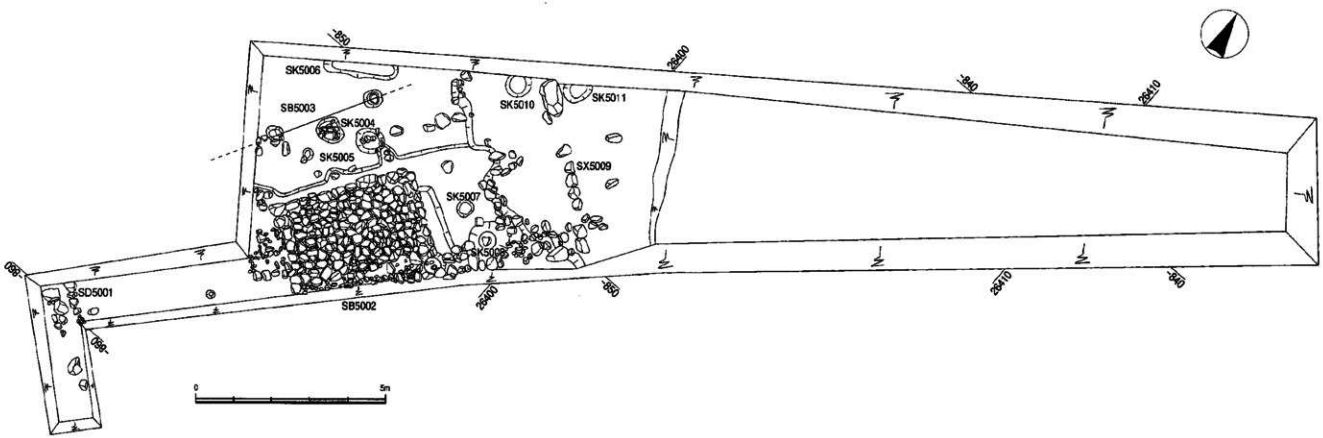
SE4990近景（西から）

SD4992、SX4993近景
（東から）

SX4988、SB4989全景（北から）

SD4986全景（北から）

第18図　第111次調査遺構詳細図



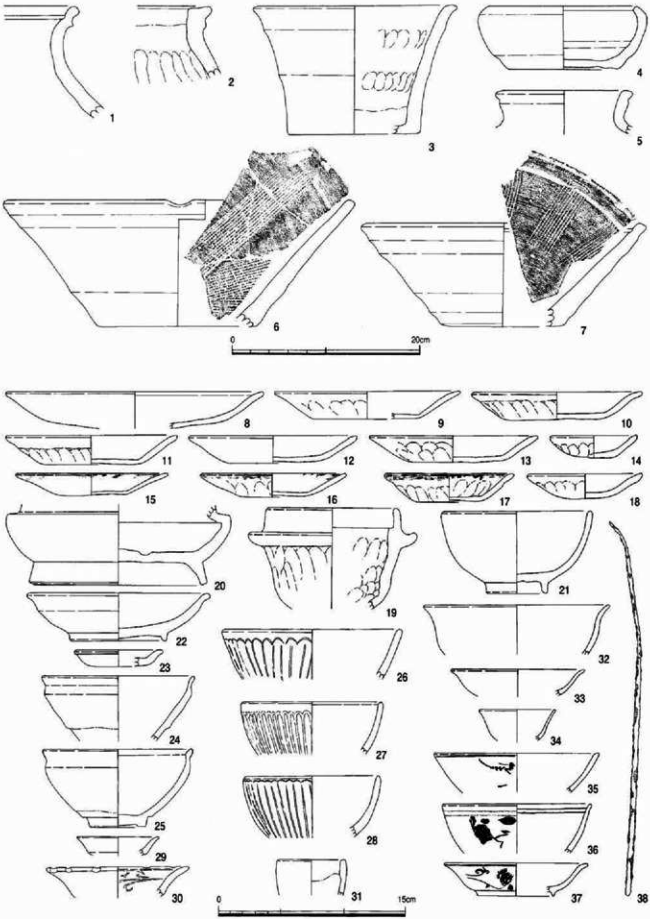
第111次調査区全景

SB5002全景
(西から)

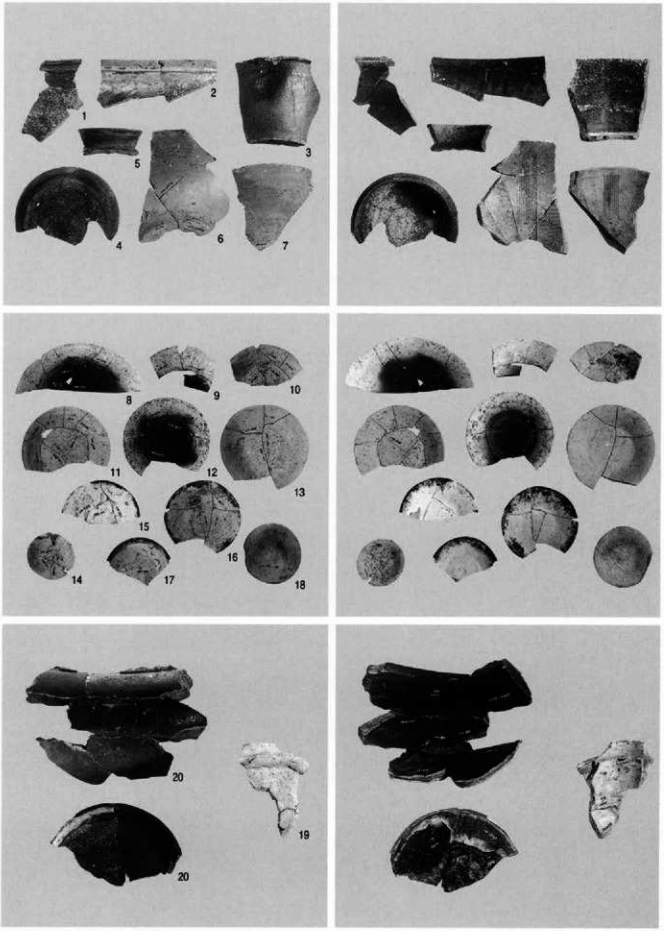
SB5002
(北から)

SK5008・5010・5011、
SX5009全景
(北から)

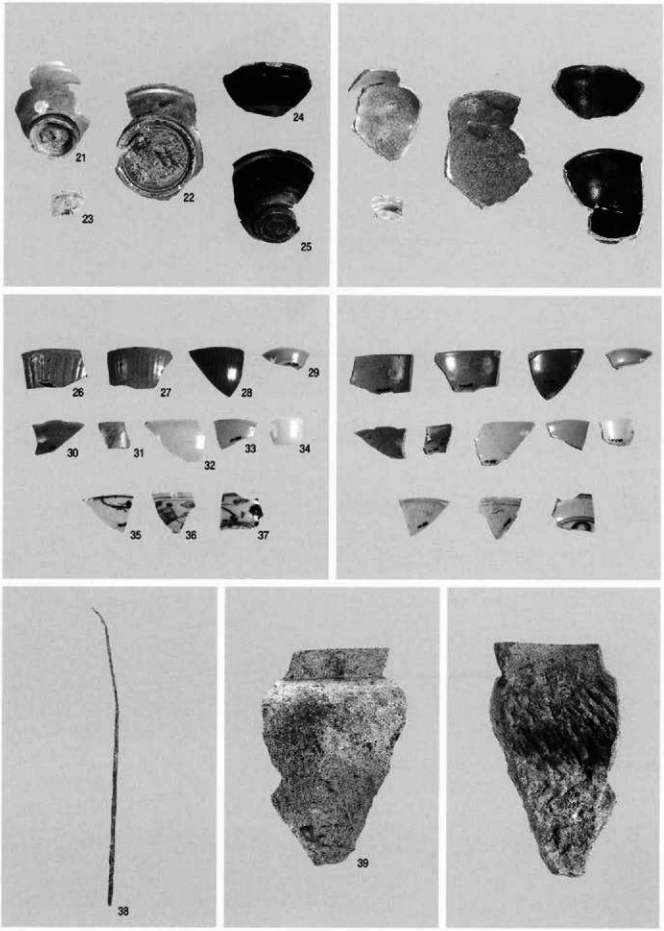
第19図　第110次調査出土遺物



越前焼甕 1・2　鉢 3・4　壺 5　擂鉢 6・7　土師質土器皿 8～18　羽釜 19　瓦質灯明台 20　灰釉碗 21　皿 22・23
鉄釉碗 24・25　青磁碗 26～28　皿 29・30　香炉 31　白磁碗 32　皿 33　坏 34　染付碗 35・36　皿 37　金属製品火箸 38

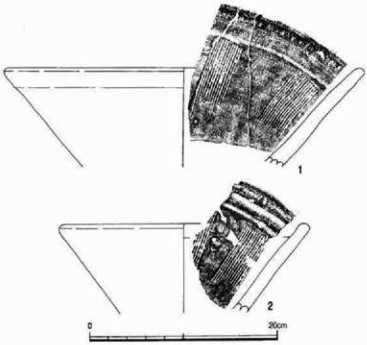


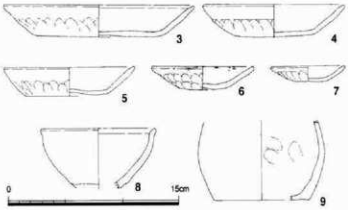
越前焼壺1・2　鉢3・4　壺5　擂鉢6・7　土師質土器皿8～18　羽釜19　瓦質灯明台20



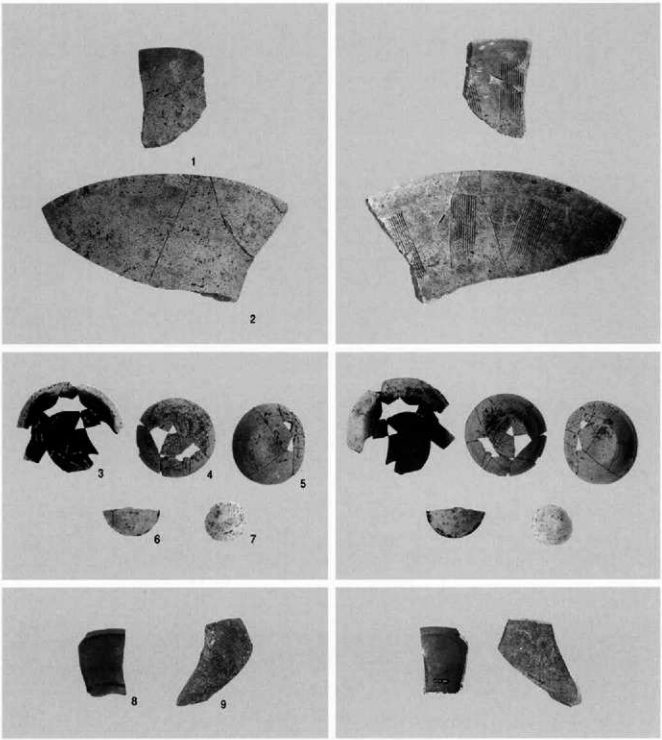
灰釉碗 21　皿 22・23　鉄釉碗 24・25　青磁碗 26～28　皿 29・30　香炉 31　白磁碗 32　皿 33　坏 34　染付碗 35・36
皿 37　金属製品火箸 38　石製品風炉 39(実測図は挿図4)

第20図　第111次調査出土遺物





越前焼擂鉢1・2　土師質土器3～7　鉄釉碗8　朝鮮製壺9



越前焼擂鉢 1・2　土師質土器 3～7　鉄釉碗 8　朝鮮製壺 9

Ⅳ 第 116 次 調 査

Ⅳ　第116次調査

一乗谷朝倉氏遺跡第116次発掘調査

調査箇所：福井市城戸の内町字川久保（9MIL－F地区）

調査目的：一乗地区中山間総合整備事業に伴う特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査

調査面積：318m²

地　　目：杉の植林（休耕地）。平成14年福井市買上げ

調査期間：平成15年８月20日～10月17日

調査主体：福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館

調査担当：水野和雄

時　　代：戦国時代

１．調査概要

中山間総合整備事業に伴う遊歩道敷設工事が半ばを迎えた平成14年、この調査箇所が公有地化された。当初の遊歩道工事計画では、民地のため迂回案が採用されていたが、公有地化の実現によって、発掘調査で道路遺構が検出できればそれを遊歩道として整備することが可能となった。

調査箇所は、福井市の朝倉氏遺跡公園センターの西側山裾にあり、南に隣接する字赤淵と今回の調査区字川久保の字堺には、第42・44次調査で検出した道路遺構SS1850・2501が東西に走っている。この東西道路遺構は、南方の南北道路遺構SS495と現状では「T字形」に接続している。今回の第116次発掘調査は、東西道路遺構に接続する南北方向の道路遺構が検出されれば「十字路」、検出できなければ「T字路」のままであったことが確定する重要な意味がある。

調査箇所の現況は、南北に細長く、直径60～70cmの杉が約40本植林されていた。伐根は極力遺構面を痛めないように行った。調査区の東辺は、畦石より東が一段低く削平されていた。西辺は、民地と公有地化した境界にコンクリート製用水路があり、民地側に朝倉時代の石垣とみられる石が処々に露呈していた。用水路をはずすと石垣が崩れ民地斜面も崩れる可能性があるため、用水路は残すこととし石垣の調査は実施しなかった。南辺は、第42次調査で検出した上殿の横の通（道路SS1850）の北辺側溝SD1853を再度調査した。

検出された遺構は、道路跡１、溝３、土塁１、門跡１、石積施設１、石列２等であった。

2．遺　　構（第21～22図、PL.24～25）

SS5801　南北38m分を検出した。道路の東西幅は一定せず、北側では石列SV5808と溝SD5805間で2.7mを計る。南側では第42次調査で検出した溝SD1854が道路の西辺側溝と考えられるが、東辺は削平されており不明であった。本来は5～6m程度の幅員があったものと考えられる。道路には直径2cm程度の砂利敷き道路面が2層検出できた。下層の砂利敷面は、固く叩き締められており残りも良かったが、上層の砂利敷面は、少し角張った大きめの砂利も敷いており、面としての残りも悪かった。とくに、道路南側半分では溝SD1853に砂利が流れ込まないためと、道路を歩きやすくするために笏谷石の転用板材を踏み石状に多く据えられていた。

SA5802　道路側溝SD5805と溝SD5806に沿って幅約0.6mの土塁が「L字形」に検出された。土塁の北方は調査外、東方は削平のため武家屋敷と考えられるがその規模は不明である。土塁の外側は、溝の側石を立ち上げ、内側も比較的小さな石を1～2石積んでいる。残存高は約0.2mであった。

SI5803　土塁SA5802の南端から約5m北で、間口約1.85m、奥行約0.7mの武家屋敷の門跡を検出した。門の前面は少し道路に張り出しており、溝SD5805も門幅分だけ屈曲して作られている。なお、門跡からは礎石や掘立柱穴は発見されなかった。門の内側は、敷地が道路や道路側溝より低く削平されており、そこに直径0.3～0.5m程度の石が投げ込まれた状態で多く検出された。

SF5804　道路の上層砂利敷面よりもさらに上層で一辺0.6m深さ0.5m、石を4段程度積んだ石積施設が検出された。これは、発掘する前からその存在が分かっていたが、中にコカコーラの缶などが投げ込まれていて近年まで開いていたことが明らかとなった。

SD5805　道路SS5801の側溝で、調査区の北半分で長さ19m分が残存していた。側石は1石で、深さも0.1mと非常に浅く、焼土で埋められていた。道路に面して開く門の幅だけ屈曲しており、セクション用畦より南側ではもともと溝は作られていなかったようである。この溝の水は、南北両方から中央に向かって流れ、途中で東流する溝SD5806へ流れ落ち一乗谷川へ排水されたものと考えられる。

SD5806　道路側溝SD5805の水を集め、一乗谷川に排水する溝であり、東方に向かって溝が深くなっている。

SD5807　発掘区の南で検出された溝で、発掘区の東辺を限る南北方向の石列に伴う溝でもある。石列の東側は、後世に遺構を削平して水田にしており、石列はその境界を示し、この溝も水田に給排水するためその時設けられたものと考えられる。

SD1853　第42次調査で検出された東西方向の道路側溝である。幅0.4m、深さ0.2mの小規模な溝として整備がなされている。しかし、この溝の規模では赤淵地区全体の水を集め一乗谷川に排水させることは困難であった。今回、溝の北辺で溝石を検出し、あわせて溝底まで掘り下げる調査を実施した。溝は、幅約0.8m、深さ約0.9mあり、赤淵地区の水を集中して排水するのに十分な溝であることが明らかとなった。また、溝の中ほどで検出された4本の木杭SX5813と東になった真竹は、後世に溝幅を狭めた際に溝石の崩落を防ぐため打ち込んだものであることも判明した。

SV5808　発掘区の北側山裾で、道路側溝SD5805と平行しない石列を長さ8.6m分検出した。石の面は東にあり道路の砂利面がここで途切れていることや、未調査地にある巨石石垣との間が溝とは

考えられないことから、現時点では道路の西端を示す遺構と考えておきたい。

SV5809　この石列は、道路側溝SD5805に接続していない。石列を境として東側は固く締まった焼土面があり、西側は道路の砂利面がここで途切れていることなどから、。現時点では道路の東端を示す遺構と考えておきたい。

SX5810　道路面に置かれた笏谷石製の板材を転用した踏み石である。とくに門SI5803の前には4石並べた状態で検出された。

SX5811　第42次調査で検出された東西方向の道路側溝SD1853の流量が多くなった時、道路SS5801はよく冠水したようである。道路砂利面が冠水すれば、わらじ等での歩行が困難になるため、笏谷石を転用した踏み石を道路面に据えていたことが考えられる。なお、踏み石に使用されている石材は、笏谷石製板石を転用したものが多いが、石臼や、バンドコの不要品も若干みられた。

SX5812　笏谷石製の台座である。道路側溝SD1853の底に投げ込まれた状態で立てかけられていた。

SX5813　4本の木杭と束になった真竹である。後世、溝SD1853の幅を狭める際に、溝石のはらみと崩落を防ぐため真竹の束を当て木杭を打ち込んだものである。

3．遺　　物（PL.26）

出土した遺物は、日本製土器・陶器(越前焼1,942点、土師質土器178点、鉄釉60点、灰釉44点、瓦質土器１点、その他78点)、輸入陶磁器(青磁88点、白磁833点、染付252点、その他30点)、金属器(銅銭４点)、石製品(112点)、その他(壁土１点）の合計3,623点であった。道路遺構面の調査が主であったため、武家屋敷や町屋の調査に比較して遺物量は少なかった。全体としてみれば、出土遺物に石製品が多く、また、白磁皿が非常に細かく砕かれた状態で道路砂利敷面に散らばっているという特徴がみられた。石積施設SF5804からは、コーヒーの缶やビニールが見つかり、最近まで閉口していたことが分かった。

大別	細別	器種	点数	%
日本製	越前焼	甕	1,319	
		壺	298	
		鉢	65	
		擂鉢	257	
		柚	3	
		小計	1,942	53.60%
	上師質	皿	176	
		上釜	1	
		その他	1	
		小計	178	4.91%
	鉄釉	碗	34	
		皿	1	
		壺	22	
		瓶	2	
		その他	1	
		小計	60	
	灰釉	碗	1	
		皿	39	
		香炉	2	
		その他	2	
		小計	44	1.21%
	瓦質	その他	1	
		小計	1	0.03%
	信楽・珠洲		6	
	近世		69	
	須恵器		3	
		小計	78	2.15%
日本製合計			2,303	63.57%

大別	細別	器種	点数	%
中国製	青磁	碗	20	
		皿	49	
		鉢	1	
		盤	1	
		香炉	10	
		壺	5	
		瓶	1	
		その他	1	
		小計	88	2.43%
	白磁	碗	1	
		皿	822	
		坏	7	
		壺	2	
		その他	1	
		小計	833	22.99%
	染付	碗	49	
		皿	199	
		坏	3	
		瓶	1	
		小計	252	6.96%
	その他		11	0.30%
中国製合計			1,184	32.68%
朝鮮製			11	
タイ製			8	0.22%
輸入陶磁器合計			1,203	33.20%

細別	器種	数量	%
金属製品	銅銭	4	
合計		4	0.11%
石製品	パンドコ	54	
	硯	3	
	砥石	7	
	臼	14	
	白	3	
	風炉	2	
	石仏	9	
	墓石	9	
	その他	11	
石製品合計		112	3.09%
その他	壁土	1	
合計		1	0.03%
総合計		3,623	100.00%

表４　第116次調査出土遺物一覧

中国製陶磁器　（１）は**青磁香炉**。高さ5.3cm、口縁はまっすぐで、脚部は形式的に付けられている。（２・３）は**白磁皿**。口径12cm、口縁は端反しており、（３）の器高は3.2cmと若干深い。（４・５）は**染付皿**。（５）の見込みには、牡丹文が描かれている。

華南彩釉皿　（６）はボソボソの胎土でブルーの釉薬が鮮やかである。

安南製水注　（７）は６片とも同一個体であり、15世紀頃の安南製（ベトナム）の染付水注とみられる。灰白色の素地に少し青味を帯びた透明の釉薬がかかっており、釉の下に染付で文様が描かれて

いる。線描きでだみが加えられていない手法は珍しい。

タイ製鍔　(8)は頸部の破片である。肩部に斜格子の叩き目文が施され、その上に線刻されている。胎土には砂粒が多く含まれ、硬く焼き締まっている。第42次調査で出土したものと同一のもので、タイ製であろう。

銅銭　(9～12)は北宋銭で、元豊通宝、景徳元宝、元豊通宝(?)、至道元宝の4枚が出土した。(12)の至道元宝は、鉄銭である。

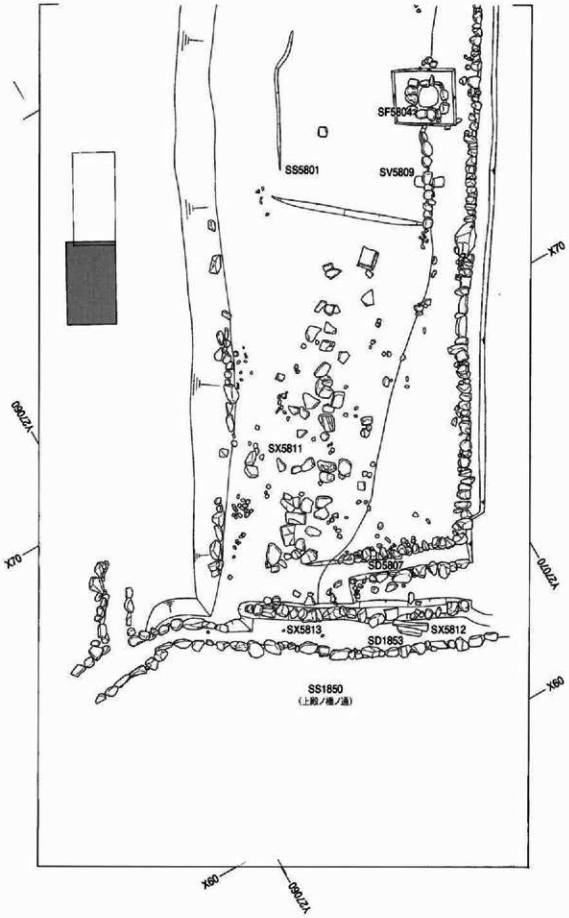
勾谷石製灯籠の台座　(13)は石灯籠の台座。底辺の一辺の幅は、0.9m、高さ0.18m、2段目の幅は、0.65m、高さ0.08m、上段の幅は、0.5m、高さ0.01mで、中央には幅0.19m、深さ0.13mの枘穴が穿たれている。2段目と上段の間は傾斜しているが蓮弁等の飾りは刻まれていない。この台座は、枘穴の大きさや形状からすれば、第112次調査で八地谷川(この八地谷川は、第113次調査の結果、幅0.9m、深さ約0.9m、両側を石積みした人工の大溝SD5073であることが明らかとなった)に投げ込まれていた元亀2年銘のある石灯籠(宝珠・笠・竿部が出土し、火袋・中台・台座は未発見)の台座石であってもおかしくないものである。ただし、出土地点は、両者間で約350m隔たっている。

4．まとめ

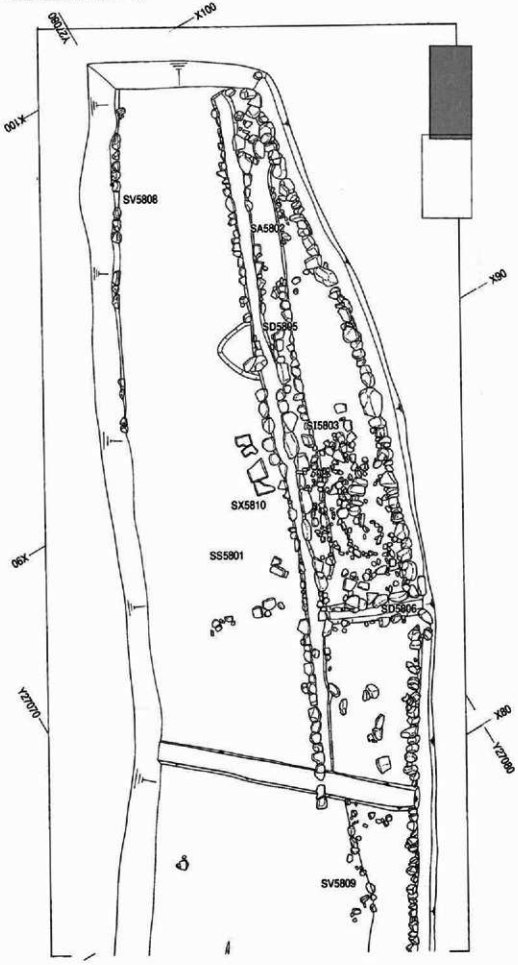
今回の調査地は、過去の第42・44次調査で検出した東西道路SS1850・2501の北側に位置する。この東西道路は、東行すれば一乗谷川に至り、橋を渡ってさらに東行すれば、上殿(朝倉宗滴の生母桂室永昌大姉の屋敷か)地蔵に至る。「永禄11年5月17日(足利義秋)朝倉屋形へ御成御門役辻固ノ事」(日本思想大系17『蓮如・一向一揆』361頁)の記録によれば、「西ノ門(『朝倉亭御成記』では御門)ニ山内・九里。北ノ門(『同』では裏御門)ニ諏方(訪)神左衛門尉・近藤。中門(『同』では中門)ニ大月備中守・窪田左近将監。同辻固之衆次第。大橋ノ通ニ魚住備後守。柳馬場ニ青木隼人佑。坂野ガ小路ニ桜井新左衛門尉。上殿ノ橋ノ通ニ氏家左近将監。遊楽寺ノ前ニ山崎小五郎。三輪小路ニ真柄備中守。笠間小路ニ真柄左馬助・川合虎福。魚住彦四郎前ニ北村平三左衛門尉。魚住前ニ富田民部丞。河原前ニ杉若藤左衛門尉。木戸ノ本ニ福岡蟹千代。託美前ニ佐々布光林坊。斎藤前ニ佐々布左京亮・小林三郎次郎。小林前ニ千秋因幡守・同左京亮。クラカリ谷ニ堀平右衛門尉。森前ニ瓜生孫六・同源四郎也」とあり、その中の氏家左近将監が固めた「上殿ノ橋ノ通」が、この東西道路に比定されるのである。このように文献史料と発掘調査遺構が一致することは非常にまれであり、一乗城下町の都市構造を研究する上で重要な発見であった。

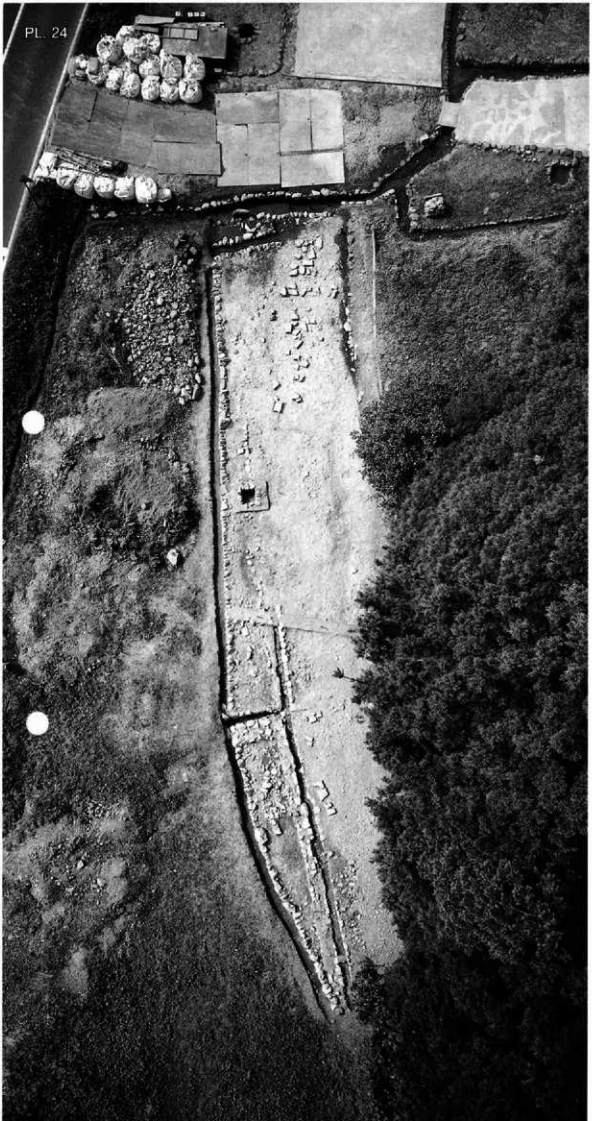
今回の調査で判明した主要な点は、①南北道路SS5801が明らかになったこと。②今までに一乗城下町で検出した道路遺構の大半が「T字路」であったのに対して、今回の南北道路SS5801は、「上殿ノ橋ノ通」に北側で取り付くことが判明し、南側で取り付く南北道路SS495とともに「十字路(四つ辻)」を形成していたことが明らかとなった。③この「十字路(四つ辻)」は、幅員にそれぞれ差があり、幅広の南北道路SS495を北上し、右折して「上殿ノ橋ノ通」を東方に進み、上殿ノ橋を渡って現在の集落で左折して北上するコースが当時の幹線道路であったと考えられる。④「十字路(四つ辻)」から北上する今回調査した道路SS5801や、「十字路(四つ辻)」から西の山裾に至る道路SS2501は、幅員が狭く作られており、幹線道路とは考えられない。⑤「上殿ノ橋ノ通」の北辺道路側溝SD1853は、従来の調査では幅0.4m、深さ0.2mとされてきたが、今回の調査で幅0.8m、深さ約0.9mと非常に大きく立派であったことなどである。

第21図　第116次調査遺構詳細図（1）



第22図　第116次調査遺構詳細図（2）



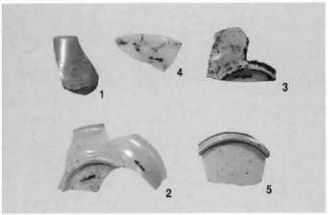


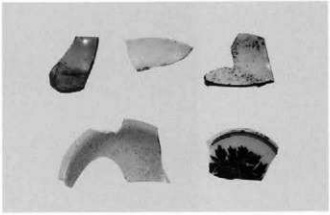
調査区全景

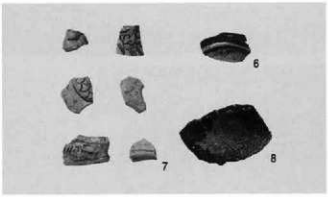
全　景
（西南から）

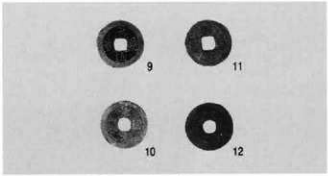
SS1850・5801、
SD1853近景
（西から）

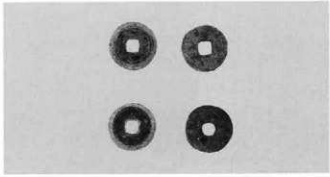
SD5805、SI5803近景
（西から）











青磁香炉1　白磁皿2・3　染付皿4・5　華南彩釉皿6　安南製水注7　外装壺8　銭9～12　石燈籠台座13

報告書妙録

ふりがな	とくべつしせきいちじょうだにあさくらしいせきはっくつちょうさほうこく
書名	特別史跡一乗谷朝倉氏遺跡　発掘調査報告
副書名	中山間地域総合整備事業施設関連緑道整備事業に伴う発掘調査 第108次、第110・111次、第116次調査
シリーズ名	
編集者名	水村　伸行
編集機関	福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
所在地	〒910-2152　福井県福井市安波賀町４－10　TEL 0776-41-2301
発行年月日	平成18年３月31日

調査地区	所在地	コード		北緯	東経	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	°′″	°′″		
第108次調査	福井市城戸ノ内町字木蔵ほか	18210	史－31	36°00′03″	136°17′38″	1,400m²	国路整備に伴う発掘調査
第110・111次調査	福井市城戸ノ内町字赤洲	18210	史－31	35°59′25″	136°18′40″	918m² 150m²	交流センター、防火施設建設に伴う発掘調査
第116次調査	福井市城戸ノ内町字川久保	18210	史－31	36°00′00″	136°17′58″	318m²	周路整備に伴う発掘調査

調査地区	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特別事項
第108次調査	道路	15・16世紀	道路１、門	越前焼、土師質皿、鉄釉、灰釉、青磁、白磁、染付、金属器、石製品	南北道路を検出
第110・111次調査	屋敷	15・16世紀	石敷建物２、溝３、井戸１	越前焼、土師質皿、羽釜、鉄釉、灰釉陶器、瓦質、青磁、白磁、染付、金属器、石製品	大区画の屋敷の一部を検出
第116次調査	道路	15・16世紀	道路１、門１、溝４	越前焼、土師質皿、鉄釉、灰釉、青磁、白磁、染付	城下町内を縦断する南北道路の一部を検出

平成18年3月20日　印刷
平成18年3月31日　発行

特別史跡

一乗谷朝倉氏遺跡発掘調査報告

～中山岡地域総合整備事業施設関連給道修復工事に伴う発掘調査～

第108次　第110・111次　第116次調査

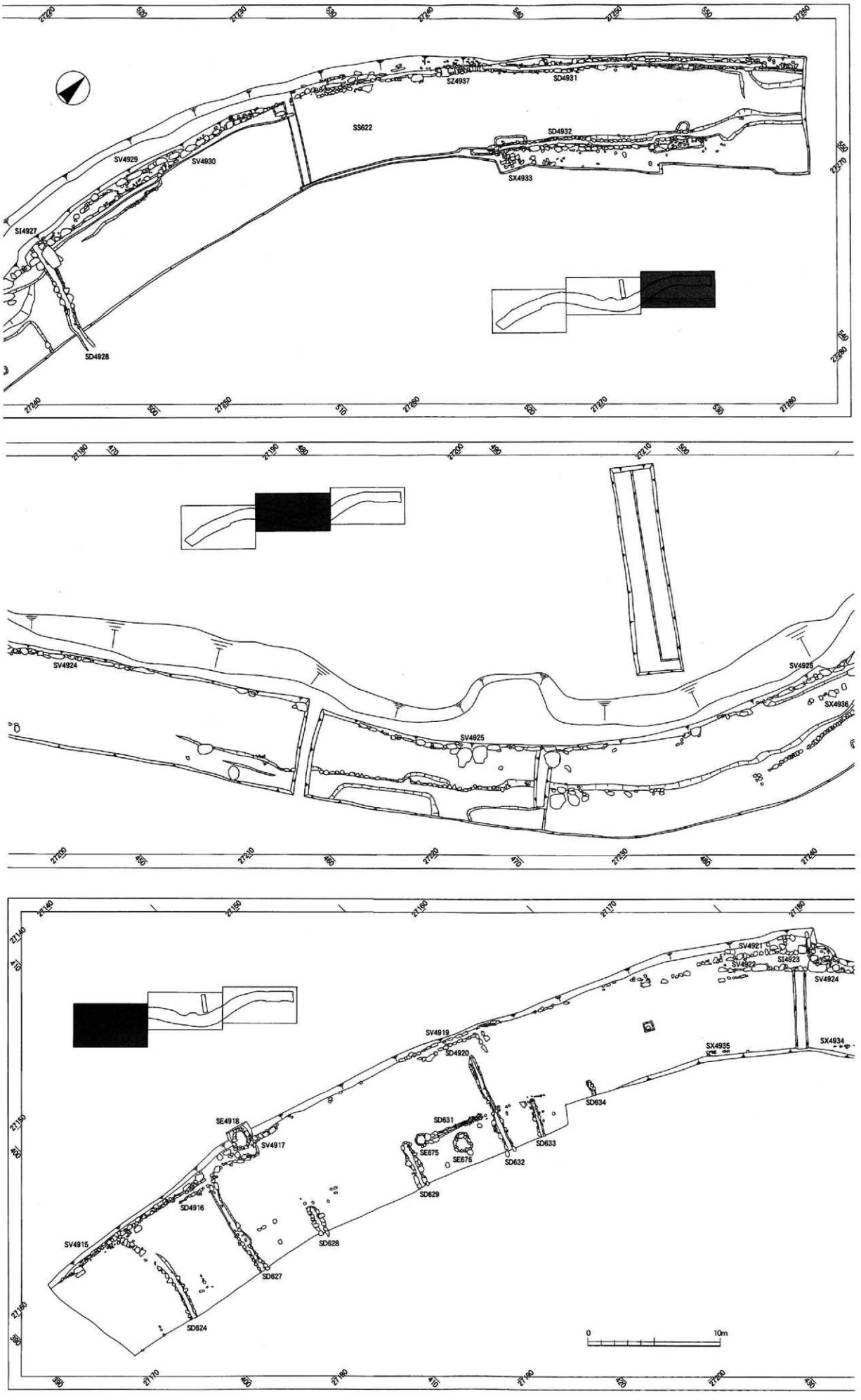
執筆・編集　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
発　　行　福井県立一乗谷朝倉氏遺跡資料館
　　福井市安波賀町4-10
印　　刷　河和田屋印刷株式会社

付図1　特別史跡 一乗谷朝倉氏遺跡

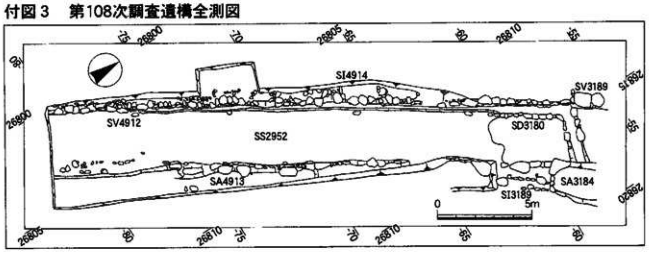
1:4,000

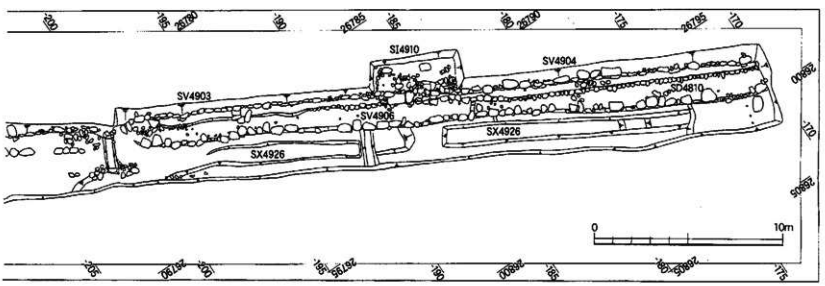
0　100　200　400　600　800　1000m

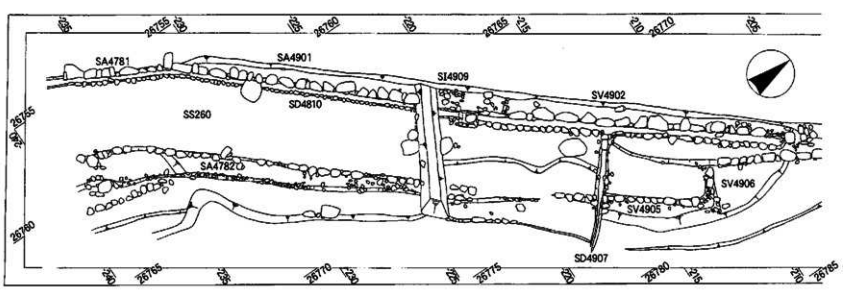
付図２　第108次調査遺構全測図



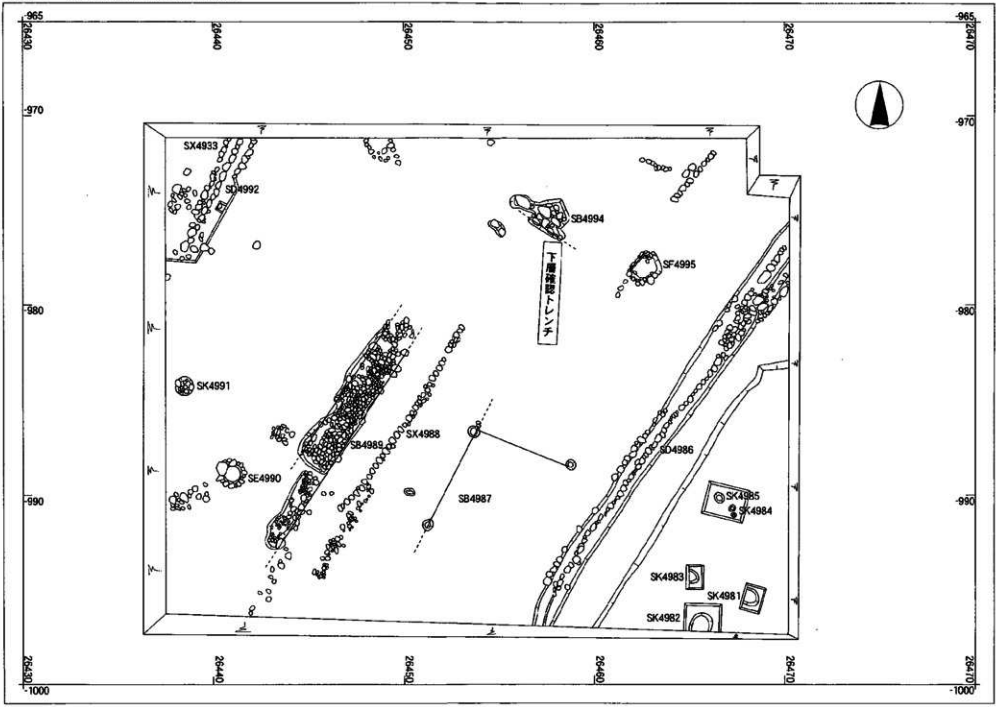
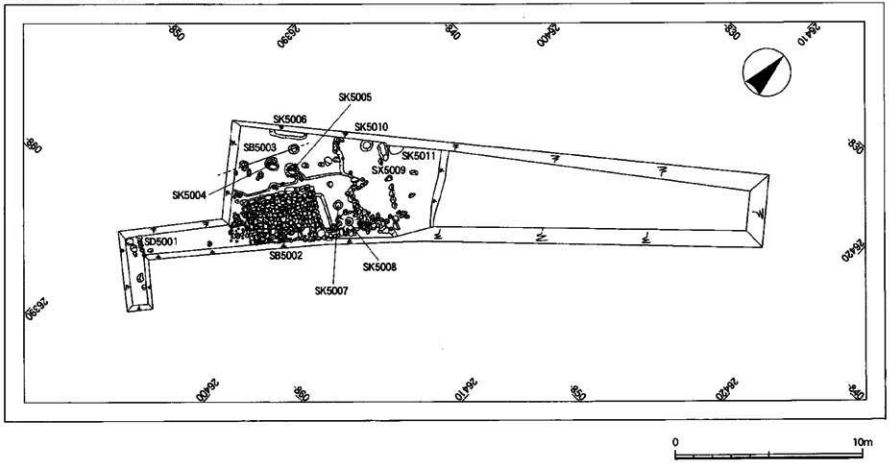
付図３　第108次調査遺構全測図







付図４　第110次調査遺構全測図



付図５　第111次調査遺構全測図